女子新國語讀本

新制版

卷六

375.9
0m15
資料室

42478

教科書文庫

4

810

42-1941

200030
2120

資料室
375.9
Om15

京都帝國大學
教授文學博士 澤瀉久孝
奈良女子高等
師範學校教授 木枝增一 共編

女子新國語讀本

新制版

文部省檢定濟

昭和十六年七月三十日
高等女學校國語科用

月曲
火文
水作文自習
土平家

土平家
水作文
左平

林　和　靖　（森琴石筆）

外の物の魂のかゝれて一つになるこゝろ

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
35394
図書

編纂の趣意

本書は、昭和十二年三月二十七日改正發布せられたる高等女學校國語科教授要目に則り、左の諸點に留意して編纂しました。

一　**國民精神の體得**―これに就いては、國體の精華、國民の美風、偉人の言行を敍し、特に日本女子としての特性を養ふに足る材料を選定しました。

二　**文學精神の涵養**―これに就いては、國文學の本質に基づき、時に於ては古今、形に於ては樣式の種々相に亙り、心情を優雅ならしむべき材料を選定しました。

三　**國語精神の把握**―これに就いては、各教材が總べて醇正なる國語に採つてあるのは勿論、更に國語の正しい相を認識せしむると同時に、國語愛護の念を培ふに足る特別なる材料を選定しました。

右三點の外、世界の情勢を知らしめて圓滿なる國民的常識を養成するに足るもの、女子の本務たる家庭生活の趣味を向上せしめるに足るものをも加へました。

昭和十二年七月

木枝增一
澤瀉久孝

目次　卷六

一　敬神　杉浦重剛　一
二　恩頼　金田一京助　八
三　音の象徴　荻原井泉水　六
四　蔦　三木露風　三
五　現代俳句抄　二四
六　影　松岡讓　二六
七　田園雜感　吉村冬彦　三三
八　小園の記　正岡子規　四三
九　水垣離　瀧澤馬琴　五三
一〇　故郷の花　平家物語　六六
一一　乙若　保元物語　七〇
一二　言葉の上の喜劇　松村武雄　八一
一三　現代短歌抄　九一
一四　徒然草抄　吉田兼好　九七
一五　誠の說　三浦梅園　一〇五
一六　天寵　森鷗外　一〇九
一七　梅　吉田絃二郎　一二六
一八　民謠　島木赤彥　一三四
一九　土　長塚節　一四四
二〇　千曲川旅情の歌　島崎藤村　一五一
二一　人臣の道　北畠親房　一五五
二二　明治維新の精神　中村孝也　一六一

附錄
日本文學年表

……終……

帝國大學圖書之印

杉浦重剛
天台と號す、滋賀縣の人、教育家、今上天皇の東宮御時代帝王倫理を御進講申上げた、大正十三年(一九二四)卒、七十。

承久の變
承久三年(一二二一)、後鳥羽上皇が鎌倉幕府の執權北條義時を討伐せられ、却つて幕軍の爲に御志の遂げられなかつた事變。

順德天皇
御名守成、後鳥羽天皇の皇子、第八十四代の天皇、承久の變後佐渡に御遷幸、仁治二年(一二四一)御年四十六、同地に崩御。

禁祕抄
三卷、順德天皇御作、禁祕御抄、禁中抄とも申し、禁中の儀式の制度故實を漢文で記述せられたもの、慶安五年(一六五二)刊行。

女子新國語讀本 新制版 卷六

一 敬神

杉浦重剛

承久の變後、畏れ多くも佐渡が島にお遷りになつた順德天皇は、

いざさらば磯うつ波にこと問はむ沖の方にはなにごとかある

と悲傷なる一首をお詠みになり、都の空をお懷かしみになりながら、御齡四十六歳にて崩御遊ばされた。天皇は御在世中、ことの外敬神の御心深く、禁祕抄といふ宮中の事柄を述べた本をお著しになつて、その中にも「朝廷にはいろ〳〵の作法は

あるが、神事を先に行ひ、他事を後に行ふこと。朝も夕も、神を敬ふ心を怠つてはならぬ。」と仰せ遊ばされてゐる。我が日本國民の精神は、神を敬ふことを第一とする所に大なる特徴がある。

日本に於ては、印度の佛や歐米の神とは違つて、前の時代に實際この世に住んでゐられたと思はれる方々を神として祀り、崇拜するのである。それ故に、神を敬ふことは、同時に祖先を敬ふことである。

人皇第一代神武天皇は、我が大八島國を統御遊ばすに先だつて、まづ神籬を建てて神々を祀り、天富命と天種子命に命じて、祭祀と朝政を掌らしめ、人民に祭政一致の實例をお示しになつた。また、御即位四年の春、詔を下して「祖先の靈力により、

神籬
神籠

崇神天皇
御名御間城入彦五瑞殖天皇。開化天皇の第二皇子。

御諡

孝德天皇
御名輕、天萬豐日豫、自雄五年（一三四）崩御、御年五十九。

大化元年
紀元一三〇五年。

今や大和を平定し、天皇の位に即くことが出來た。こゝに祖先の靈を祀り、敬神と孝の道をつくさねばならぬ。」と仰せになつた。さうして、鳥見山で祖先の祭を行ひ、人民に敬神の實をお示しになつたのである。

第十代崇神天皇は、その御諡にも知られるやうに、政治を行はせられるに際して敬神を第一とせられた。或年、民間に傳染病が流行した時、天皇は、三種の神器の宮中に祀つてあることが、天照大神の御怒に觸れたのではなからうかとの御懸念から、新殿を作つて神器を遷し、神々をお祀りして病の靜まることをお祈りなされた。

人皇第三十六代孝德天皇の大化元年は、我が國最初の年號の制定せられた記念すべき年であつた。天皇はこの機會に、

蘇我石川麻呂
蘇我入鹿の從兄弟。

中大兄皇子
舒明天皇の皇子、後に即位せられて御諡を天智天皇と申し上ぐ。

中臣鎌足
後の藤原鎌足、天智天皇八年（三三九）薨、年五十六。

文武天皇
御名珂瑠、慶雲四年（三六七）崩御、御年二十五。

大寶律令
文武天皇の大寶元年（三六一）、刑部親王・藤原不比等等によつて編纂せられた律六卷、令十一卷。

新政の方針をお定めになつた。のみならず、その頃右大臣をつとめてゐた蘇我石川麻呂の申出によつて、皇太子中大兄皇子や中臣鎌足等とともに、天地の神々に對して次のやうな御誓文を遊ばされた。「蘇我氏の横暴も、祖先の御神力によつて止み、皇位は大地のやうに不動の基礎の上に定まつた。今後は、上に二つの政治なく、下に二つの心を有する者はない。もしこの誓約にそむく者あらば、神は直ちに天罰を降すであらう。」この御誓をなされると同時に、人民に對しても、「先づ神々の祭を行ひ、しかる後に天下の政治を議すべし。」と仰せになつたのである。

第四十二代文武天皇は、政治上の重要なる事柄を規定した大寶律令を發布された。時は大寶元年である。この規定に

官幣社
後宇多天皇
御名世仁、龜山天皇の皇子、正中元年（一九四）崩御、御年五十八。

弘安四年
紀元一九四一年。

元
支那の國朝の一、忽必烈が宋を滅して建國したもの、西暦一三六八年滅ぶ。

よつて、京都にはいろ〳〵の役所が建造されたが、その中で最も重要なものは、神祇官と太政官であつた。神祇官は神々の祭を掌る役所であり、太政官は政治を掌る役所である。然るに、神祇官の方が高い位にあつたことは、取りもなほさず、神を祀ることが國家にとつて、最も重要なことであるといふ趣旨から出たものに外ならなかつた。今日我が國の多くの神社の中に、官幣社といつて、祭の日には宮内省から供物を捧げられる神社がある。この官幣社といふ名稱は、その昔神祇官で名づけたものである。今日では神祇官がないから、官幣社の事は内務省がその任に當つてゐる。

第九十一代後宇多天皇の弘安四年、元の大軍が我が九州博多灣に攻めよせた時は、國民は上下ともに生色を失ひ、國家の

龜山上皇　第九十代の天皇、御名恒仁、後嵯峨天皇の御子、嘉元三年（一二九五）崩御、御年五十七。

石清水八幡宮　官幣大社、京都府綴喜郡八幡町に鎮座、祭神は應神天皇・神功皇后・比賣大神の三座。

慶應三年　紀元二五二七年。

徳川慶喜（よしのぶ）　徳川第十五代將軍、徳川齊昭の子、後に公爵を授けられる、大正二年（一九一三）薨、年七十七。

氷川（ひかわ）神社　官幣大社、埼玉縣大宮町に鎮座、祭神は大巳貴命・素盞嗚命・櫛稲田姫の三座。

上に一大危難が加らうとしてゐた。その際、畏れ多くも龜山上皇は、御親ら京都の石清水八幡宮に御參拜になり、夜を徹して神々の加護をお祈り遊ばされた。その上、勅使を伊勢大神宮に遣はして、御自身の御生命と國難とをお取換へになるとまでお誓ひになつたのである。

明治天皇もまた、ことの外敬神の御心が深くあらせられた。慶應三年正月御踐祚あらせられて間もなく、徳川慶喜が大政を奉還し、王政復古となるや、如何にして新政を行ふべきか、日夜大御心を惱ませられた。さうして、廣く勤王の人々と計つて新政の方針を定め、これを明治元年三月、天地神明にお誓ひ遊ばされた。これが有名な五箇條の御誓文である。

天皇はまた氷川神社を武藏の鎮守と定め、神靈鎮祭の詔や

御政始

國體讀本　杉浦重剛・白鳥庫吉著、松宮泰一郎編著、國體の本義を說いたもの、昭和四年（一九二九）六月刊行。

宣教の詔等をお下しになつて、御親ら敬神の實をお示しになつた。このほか、外國へ使臣をお遣はしになる際には、必ずその使臣をお召しになつて、宮中の八咫鏡を祀つてある賢所に奉拜させ、立派にその任務を果すことが出來るやう、神にお祈をせしめられたのである。今日でも毎年一月四日の御政始には、「先ヅ神宮ノ事ヲ奏ス。」といふ事があるが、これは大寶令時代からの定めである。

以上述べたやうに、我が國は昔から敬神の風が盛である。この點では上下共に心を同じくし、神國としての礎石を固く築き上げてゐる。これが我が國の他國と異なる最も著しい特徴であり、また、我が國家の力の中樞をなすものである。

（國體讀本）

金田一京助
岩手縣の人、言語學者、東京帝國大學助教授、文學博士、明治十五年（一八八二）生。

日高
北海道の一國。

二恩（みたまの）

金田一京助

吾々の人差指、英語のインデクスは、共にこの指で物を指す意味で名づけてゐるが、アイヌ人は、この指を椀嘗指（ドイ）と云ふ。漢語の食指も、恐らく、この指が食物の攝取に用ひられたからの命名であつたらう。

日高の沙流（サル）から、八度上京して私の語學の助手になつてくれたコポアス婆さんは、生粋のアイヌで、しかも昔風の堅い婆さんであるが、家の者と一緒に食事をするうちに、椀嘗指の名の謂はれを吾々に合點させてくれた。甘い物が好きで、汁粉など、二三杯替へて喜んで食べてくれたが、その最後の椀の時のことである。人が見てゐようがゐまいが、底に残つた餡を

ぺろ〳〵なめはじめる。やにはに、節くれ立つた食指を椀の底へ突込んで、なほくつついてゐる餡粉をすつかり拭つて堅にその指をなめるのである。

汁粉の時は、まだ始末がよい方で、牛汁、豚汁の椀をなめ廻す時は、家の者も殆ど弱つた。指が勿論脂だらけになる。その指を最後は自分の頭の毛へなすりつけて拭くのであつたから。「あれだけは、よして下さいと言つて頂戴」と、家の者どもが見かねて私に言ふので、危く私も口に出さうとしたが、言はないでよかつた。婆さんが例の指を頭ばかりでなく、自分の著物へまでなすりつけながら、口の中で獨り呟くのをじつと聞いて、始めて、婆さん達がさうする心持をはつきり摑むことが出來ると共に、寧ろそれを卑しいと見てゐる私達自身の心持

洗滌する

を差入らなければならなかつたからである。

この婆さん達の心持では、折角の賜物を少しでも椀の底へ残してむだにすることが、濟まないこと、勿體ないことなのである。滓の滓まで頂戴しますといふ感謝の心持を、最も慇懃に、最も恭謙に表現する、それがその村人の篤い禮儀の一つだつたのである。何も椀の底へくつついた部分まで食べたくてするのではなかつたのである。だから、椀の緣や外側についた餡粉まで指頭や手のひらで拭つて、二三度、椀を兩手の掌の間にくる〳〵廻して、すつかり押拭つて、微塵も殘さず、洗つたやうにして下に置くのである。一つには、これは自分の食器を人が洗はずに濟むやうに、綺麗にして返す積りでやることなので、村ではかうして食器は別段洗滌せずに次に用ひら

餘瀝
生靈

れるのである。勿論、箸も椀に浸つた先の方をば最後にしやぶつて、なほ手でしごいて、椀の上へ横たへ、その手は、やはり頭や身體を拭くのである。

この頭髮や衣服へよごれた手をなすりつけることも、單に不潔と言つて顰め顏をすべきではなかつたのみならず、吾々の遂に思ひも寄らない心持からすることだつた。

アイヌは椀で酒を飲むのであるが、最後の椀の底の酒の雫は、やはりかうして指で拭つて、よく頭へなすりつける。これは自分の守護神に差上げる積りなのである。肉汁や馳走の餘瀝を髮や身體へなすりつけるのもその心持で、えらい人の賜物によつて自分自身の生靈なり生命なりを勢づけ、我が運勢なり運命なりをもえらい人にあやかつて行かうといふ心

持でやつてゐるのだつたのである。私が、いつもアイヌに教へられ、又心を打たれるのは、未開人の持つ、敬虔な心持である。これに比すると、吾々は如何に淺ましく物質的にのみ物を觀てゐることであらう。物を貰ふとする、吾々はたゞその物だけしか見てゐない。アイヌは、その物に添うてゐるその人の魂の一部をも一緒に貰つてゐるのである。勿論、吾々の遠い祖先にもかうした心持はあつたであらう。護刀を讓られて膚身放さず持つ心には、刀に籠つた精神力まで添へて持つてゐたに違ひない。「形見分」などにしても同じ事が言へると思ふが、それが「泣く泣くもよい方を取る形見分」まで墮落し、幾ら程の品物だなど値踏みし出すやうになつた。もとは髮の毛などのやうな無價値のものだつてよかつた。髮の毛は特に

値踏み
髮の毛は特に生命の指標
英語のライフイン

生命の指標のやうに考へられる大事なものでさへあつたから、これに膏をそゝいで大事にする習慣が無意識に今日に傳はつて、香油やポマードなどのおしやれの爲の、若しくは社交上の禮儀の爲のものに進化した。アイヌが酒の滴りを頭に塗り、牛の脂を髮にすりつけるのが、その原始の姿に外ならない。

曾て「日本語には恩といふ語がないが、恩といふ觀念が發達しなかつたのかしら。恩賴（みたまのふゆ）といふのが近いやうだが、これは何の意だらう。」と聞かれたことがある。

「一體下さることを古語に「たまはる」、與へる敬語を「たまふ」と云つた。それから出て「見給ふ」「仰せ給ふ」、又、自己の動作に附けては「見たまふる」「申したまふる」と云つた。その「たまふ」の

デクスの意、人間の命がそこに宿つてゐて、それを切ると生命を縮めることになる意。
ポマード
煉香油の意、フランス語。
進化する

神代紀　日本書紀、神代の上の卷。

折口さん　折口信夫、大阪府の人、國學院大學・慶應義塾大學教授、文學博士、明治二十一年（一八八四）生。

垂仁紀　日本書紀、垂仁天皇の卷。

景行紀　同、景行天皇の卷。

語源が私に久しく解けなかつた。そして、神代紀の「咸恩頼ヲ蒙ル。」の恩頼を「みたまのふゆ」と訓じてゐるこの「たまふゆ」も、必ず「たまふ」「たまふる」と同根のものだと信じてゐた。然るに、折口さんに據れば「魂の來りて觸れて一つになる時だから、たまふりと言ふ」のである。この「たまふり」といふ言葉こそ、私の久しく求めてゐたその語なのである。「恩頼」は御靈の觸に違ひないし、「たまふる」も靈觸る、「賜ふ」も靈觸に相違ない。即ち、物を賜はると言ふ心持は、その物によつて御靈に觸れるといふことに外ならなかつた。垂仁紀には「聖帝ノ御靈ニ頼リ、還リ來ルヲ得タリ。」と見え、景行紀には「神祇ノ靈」と見えてゐるなど、恩頼は即ち靈の加る考に外ならなかつた證據である。即ち、敬語の「給ふ」も「給ふる」もかうした古代人の懐かしい信仰を

檀那　老いさらぼふ　よみがへるがに　さもしい　北の人　金田一京助著、アイヌ語研究に關する隨筆を集めたもの、昭和九年（一九三四）五月刊行。

盛つた語であつた。その語源の絲をほのかに辿り得たのは、婆さんの人差指のお蔭だ。

私達のさゝやかな料理に滿足しては、獨り口の内で「檀那がたの召上り物、殿がたの召上り物、この老の身にかづけ頂いて、あはれ老いさらぼひたる骨も身も、のび〳〵としたる心によみがへつた。檀那がたの尊いみ靈にふれ、殿がたの盛な幸運に、ともしき老の魂もよみがへるやうに……。」さう言ひつゝ、人差指の指元まで、滴り流れる牛の脂を髪に身に塗りつけてゐる老媼を發見した時に、私は、笑ふどころか、涙ぐまされてしまつたのである。「みつともない。」だの「さもしい。」などいふ文明人の虚僞を破却し盡くして、これはまた何といふ純眞な虔しやかな心情のあつたものであらうか。

（北の人）

荻原井泉水
名は藤吉、東京市の人、俳人、明治十七年（一八八四）生。

歸する

五行

金剛不壞

三音の象徴

荻原井泉水

一　あいうえお

すべての音は皆、あ・い・う・え・おに歸する。

そんな事は解りきつた事だが、私達の生命といふものも亦、あ・い・う・え・おの五音で象徴されてゐるといふ氣がする。

木・火・土・金・水を五行といふ。「あ」はあかるく、あか〳〵と「火」のもつ生命力である。「い」はいさましく、いき〳〵「木」のもつ生命力である。「う」はうるはしく、うき〳〵「水」のもつ生命力である。「え」は古語に敢の義がある。えい〳〵は力のみなぎつた「金剛不壞」の聲ではないか。「お」はおほきく、おつとりとした「土」のもつ姿ではないか。

國技館
東京市本所區兩國橋際にある角力の演技場。

鐵骨がつちりとした

カンダカヂチヨ
東京市神田區鍛冶町。

火のやうに明朗に、木のやうに生々と、水のやうに自由に、金のやうに堅固に、土のやうに悠々と生きてゆくことこそ、完全な人としての生方だと思ふ。

あ―い―う―え―お―。大きく深く息をしながら、大空へ向かつて呼びあげて見よ。

二　かきくけこ

コクギカン（國技館）といふ言葉はどうもいひにくい。かき・く・け・この音がつゞきすぎてゐるからだ。だが、コクギカンといふ音に依つて、鐵骨を傘狀に組立てた、あのがつちりとした建物がそのまゝ出てくるではないか。

「カンダカヂチヨノカドノカンブツヤノカチグリカタクテカメナイ。」といふ文句も早口には言へまい。さうして、此の勝

栗はいかにも堅さうな感じがする。

か・き・く・け・こといふ音は、大體、冬の感じがする。

かん〳〵に凍てついた朝、きん〳〵としみる音、くつきりと澄んだ空、げつそりと枯れた土、こう〳〵と冴えた月――すべてのものが張りきつて、打てば響くやうで、投げれば彈ね返るやうな、つまり鋭い角度をもつて、取組みあつてゐるリズムである。

冬には健康なる美しさがある。素朴なる感味がある。國技としての相撲も冬の季節が本場所の本格たるものだと思ふ。七草も過ぎたので蓬萊飾をくづして、私は今、勝栗を嚙んでゐる。

七草蓬萊飾

虚無的な

三　さしすせそ

さ・し・す・せ・そは風の音だ。だが、大きな音ではない、さらさらと松の枝をわたる程の風、そよ〳〵と草の葉をなでる程の風だ。風には自由な、氣まゝな姿がある。それと共に、取りとめもない、虚無的な心持がある。

さ・し・す・せ・そは、また水の音だ。さら〳〵と流れる水、しとしとと滴る水、せん〳〵と噴いてゐる水だ。かうした水の感じは、要するにすゞしくて夏の趣に違ひない。水の音でも聞いて樂しむといふ氣持は、たつた一人で、山の中にでもゐたいといふ態度である。

つまり、さびしく、しづかにといふ心境だ。――これも亦、さてあり、しである。

四　らりるれろ

ラヂオの演藝放送はめつたに聞いたことがないのだが、正月の閑を得た氣持で、今夜は小唄を聞いた。歌ひ手は評判の人だけあつて、節廻しもこまかく上手だし、聲音も美しいものだつた。殊に、ら・り・る・れ・ろの音があざやかに澄んでゐるのが好かつた。

もう二十年も前、私は謠曲をすこしやつたことがあるけれども、ら・り・る・れ・ろの音はむづかしいものだと思つたことがある。

字を書く上でも、假名は、殊にら・り・る・れ・ろの字がむづかしいと思つてゐる。私達の句には「何々してゐる」など留めた句が多いので、短冊の終に「る」の字が3の字のやうになつたり、釣針の先のやうになつたりして、いつも氣になる。

ら・り・る・れ・ろ――――これは假名の最後の列だ。――――わ・ゐ・う・ゑ・をはあ・い・う・え・おにかへる。人生といふものを一生涯の習字としたならば、人生も亦ら・り・る・れ・ろの所が一番にむづかしいのではないかと思はれる。

（身邊の書）

身邊の書　感想文を集めたもの、昭和十一年（二九六）九月刊行。

五十音

北原白秋

水馬赤いな、ア・イ・ウ・エ・オ。
浮藻に小蝦もおよいでる。
柿の木、栗の木、カ・キ・ク・ケ・コ。
啄木鳥こつこつ、枯けやき。

大角豆に酢をかけ、サ・シ・ス・セ・ソ。
その魚淺瀬で刺しました。
雷鳥は寒かろ、ラ・リ・ル・レ・ロ。
蓮花が咲いたら、瑠璃の鳥。

（白秋全集第九卷童謠集）

三木露風
名は操、舊號羅風、兵庫縣の人、詩人、明治二十二年（一八九）生。

四　蔦

三木露風

蔦

落ちたる塀にまつはる蔦は、
悲しけれども力あふるる。
われまた延びよ。安らかに
深き心の手をのべて。
煙や、霧や、山岳や、
ああいかにかのうるはしき。

白き手の獵人
三木露風著、詩集、主として抒情的象徴詩と思想的象徴詩を集む、大正二年（一九一三）、刊行。

幻の田園
三木露風著、詩集、象徴詩を集む、大正四年（一九一五）刊行

延びよ。この養ひの中に
自らの日の完きまで。

（白き手の獵人）

晩秋

秋の入江の日はさびし、
風はさやさやかがやけど、
波は寄る寄る見ゆれども。
暮の心の切にして
蘆間の鳥のしば鳴くか、
秋の入江の日は寂し。

（幻の田園）

日野草城　名は克修、東京市の人、會社員、俳人、明治三十四年（一八九一）生。

河東碧梧桐　名は秉五郎、松山市の人、俳人、昭和十一年（一九三六）歿、年六十五。

高濱虛子　名は清、松山市の人、俳人、明治七年（一八七四）生。

尾崎紅葉　名は德太郎、東京市の人、小說家、明治三十六年（一九〇三）歿、年三十七。

大須賀乙字　名は積、福島縣の人、東京音樂學校教授、俳人、大正九年（一九二〇）歿、年四十。

矢田挿雲　名は義勝、横濱市の人、小說家、俳人、明治十五年（一八八二）生。

松瀨青々　名は彌三郎、大阪市の人、俳人、昭和十一年（一九三六）歿、年六十八。

五　現代俳句抄

更けて燒く餅の匂や松の內　日野草城

桃咲くや湖水のへりの十箇村　河東碧梧桐

もたれあひて倒れずにある雛かな　高濱虛子

垂籠めて花に物縫ふ世帶かな　尾崎紅葉

捨つる花箕に入れてあり蝸牛　大須賀乙字

麥秋に戰塵今日も揚りけり　矢田挿雲

藻の花のまはる時あり魚涼し　松瀨青々

山口誓子　名は新比古、京都市の人、會社員、俳人、明治三十四年（一八九一）生。

村上鬼城　名は荘太郎、高崎市の人、俳人、昭和十三年（一九三八）歿、年七十四。

夏目漱石　名は金之助、東京市の人、英文學者、小說家、俳人、大正五年（一九一六）歿、年五十。

楠緒子　文學博士、大塚保治夫人、歌人、明治四十三年（一九一〇）歿、年三十六。

嶋田青峰　名は賢平、三重縣の人、俳人、明治十五年（一八八二）生。

青木月斗　名は新護、大阪市の人、俳人、明治十二年（一八七九）生。

原石鼎　名は鼎、島根縣の人、俳人、明治十九年（一八八六）生。

閻王の前に晝寢の床几あり　山口誓子

蜻蛉も澄んで來る盆花賣りに來る　荻原井泉水

小鳥この頃音もさせずに來て居りぬ　村上鬼城

床の中で楠緒子さんの爲に手向の句を作る

有るほどの菊拋げ入れよ棺の中　夏目漱石

參道の並木の晴や明治節　嶋田青峰

山の燈の消えてはとぼる野分かな　青木月斗

竹馬の羽織かむつてかけりけり　原石鼎

松岡　讓
新潟縣の人、小說家、明治二十四年（一八九一）生。

神祕的
祕—秘

三尺去つて
弟子七尺去ツテ、師影踏ムベカラズ。（童子教）

恭　敬

六　影

松岡　讓

影は生きものである。生きものの影が生きてゐるのはいふまでもないことながら、無生物でも影だけは必ず生きてゐる。誠に影は不思議な生きものである。

自分は子供の時から、影の中にいつも或神祕的の力を認めてゐた。殊に自分の影をじつと視つめてゐると、何とも知れない神祕感がそこにあるのだつた。子供心に影を不思議な存在であると氣づいたのは、自分といふものの存在を意識した時とあまり隔つてはゐないだらう。だから「三尺去つて師の影を踏まず。」といふのは、少くとも自分にとつては、師に對する禮儀とか恭敬とかいふ殊更めかしき道德的の臭味をもつ

辱—恥

呪　ふ

不即不離
影法師
いみじくも

たものとは見えなかつた。正直のところ實感があつたのである。自分はいつしか人の影を踏むことを罪惡と思ふやうになつた。意識して人の影を踏むことは、彼を辱かしめ彼を呪ふことだつた。

凡そ、影の奇怪な存在に氣づいたものは、その中に測り知られぬ想像の盛られてゐるのを感得するであらう。影は彼に似て、彼とも違つた不即不離の一人格なのである。影法師とは、いみじくも名づけられたこの不可思議な人格の名稱ではないか。田舍に生まれて、田舍に成長した自分には、少年の頃の四季それ〴〵の影法師がいまだに懷かしい。川の土手を傳つて歸路を急ぐ時、並木の間を織つて刻々に伸びる長い長い影法師と共に歩くことは、獨りで寂しい田舍道を歸る少年

呟く
擧句
むづ〳〵する
映—寫

には、涙ぐましい程な慰めであつた。自分は獨りでぶつ〳〵呟いたり、口笛を吹いたりして歩いた。影も亦音こそ立てないが、自分と同じ身振をする。何といふ親しさであらう。併し、それが伸びに伸びて、山の麓まで淡い影を流した擧句、いつの間にやら、あたりの光景が一面に薄紫に煙つて、自分の小さい姿が、黄昏の中に吸込まれる時、自分はいひ知れぬ憂鬱を覺えた。さうして、影法師を見失ふまで後れた事を悲しんだ。雪の上に落ちる透きとほつた水の様な影法師も、自分は好きであつた。霜やけでむづ〳〵する手を兩脇にかゝへこんで、安つぽい毛絲の襟卷を首に卷いたまゝ、二つの鼻から白い息を吐いて、いつまでも影を見守つたことが幾度あつたであらう。雪に映る影は、地に落ちる影にくらべて、飽くまでも天上

鋪道
群像
魅する
表徵
嶺—頂
來迎
外道
形影相弔ふ
筑々子立シ、形影相弔フ。(晉の李密—陳情表)
雙影相憐む

的で澄んでゐるのであつた。

晩春初夏の都會の鋪道に囁きかはす影の群像に誰か魅せられないものがあらう。その代り、ゆがめられた己の影の醜さに呆れないものがあらうか。擴大された影は、時に惡魔の如く己を驚かし、時に神の如き威嚴をもつてそゝり立つ。其の時の自分は、影の足元へ投げだされた、みすぼらしい、か弱きものの表徵であるかの如き感があるだらう。高山の嶺に登つたものは、雲にうつる己の影を見て、しば〳〵そこに來迎の佛の姿を描き、また、外道の笑に驚くのである。形は形でしかない。しかし、影は無限に伸び又縮むのである。

「形影相弔ふ」といふ句には、何と寂しいながらに親しい感じが盛られてゐる事だらう。同じく「雙影相憐む」といふ句にも

東坡　姓は蘇、名は軾、號は東坡、支那宋代の詩文家。（西暦一〇三六―一一〇一）

冥界

蠱惑

深い趣がある。東坡は必ず孤獨な詩人であつたであらう。影を知る事は己を知る事であつて、孤獨の人のみよくする所だからだ。影こそ其の友であり、母胎でさへもあるのである。

ゲエテの影繪

若し己に影がなかつたら、どんなに寂しくつらいことだらう。自分は時々そんなことを考へる。物語の中の幽靈や妖怪變化に影のないといふことは、誠に故あることだ。影こそはこの現世と冥界とを分かつ唯一の鍵ではあるまいか。

影繪のもつ不思議な蠱惑に氣のつく人は、時にそれが遙に

示唆する

ゲエテ　獨逸の大詩人、ファウストの作者。（西暦一七四九―一八三二）

銅板

神韻縹渺たる

ファウスト　二部より成る詩劇、人生の宰禰を味はふことの出來ない大學者ファウストが、長い間の遍歴と努力の後、初めて人生の意義と宇宙の眞理とを發見するといふ筋、西暦一七八〇年刊行。

堅白異同の辯

日中出現　松岡讓著、隨筆集、昭和四年（三五八九）十一月刊行。

寫眞以上に、神祕的な何ものかを示唆することを認めるだらう。二三年前、自分はゲエテの像を八十餘面も集めた本を購つたことがある。しかも、その八十餘面の銅板の大半は、彼が青年時代からの影繪であつた。自分はそれらを油繪の像と比べ見て、外貌の特性をなすのにさしたる遜色がないやうに思つた。のみならず、神韻縹渺たる趣に至つては、寧ろ影繪がファウストの作者にふさはしいやうにさへ思はれたのである。それを見ながら、自分は、小さい時、好んで自分の影をほの暗い障子に映したことを想ひ出した。全く影は自分とは別な生きものなのだ。だから、昔嘶にある「驢馬は賣つても影は賣らない。」といふ主張は、一見堅白異同の辯に似て、其の實不思議な魅力をもつた主張ではあるまいか。

（日中出現）

田舍の自然

七田園雜感

吉村冬彥

本名は寺田寅彥、高知縣の人、物理學者、理學博士、東京帝國大學教授昭和十年(一九三五)卒、年五十八。

一

田舍の自然は確に美しい。空の色でも、木の葉の色でも、都會で見るのとはまるきり違つてゐる。さういふ美しさも、馴れると美しさを感じなくなるだらう、といふ人もあるが、さうとは限らない。自然の美は奥行はさう見透かされ易いものではない。永く見てゐればゐるほど、いくらでも新しい美しさを發見することが出來る筈のものである。若し出來なければ、それは眼が弱いからであらう。一年や二年で見飽きるやうなものだつたら、自然に關する藝術や科學は、數千年前に完結してしまつて居る筈である。

六歳になる親類の子供が、去年の暮から東京に來て居る。これに「東京と國とどつちがいゝか。」と聞いて見たら「お國の方がいゝ。」と答へた。「どうしてか。」と聞くと「お國の川にはえびが居るから。」と答へた。此の子供の「えび」と言つたのは、必ずしも動物學上の「えび」のことではない。えびの居る清冽な小川の流、それに翠の影を浸す森や山、河畔に咲亂れる草の花、さういふやうなもの全體を引つくるめた田舍の自然を象徴する「えび」でなければならない。東京で魚屋から川蝦を買つて來て、此の子供にやつて見れば、此のことは容易に證明されるだらう。

私自身も此の「えび」のことを考へると田舍が戀しくなる。併し、それは現在の田舍ではなくて、過去の思出の中にある田

舍である。「えび」は今でも居るが、「子供の私」はもう其處にはゐないからである。けれども、此の「子供の私」は、今でも「大人の私」の中の何處かに隱れて居る。そして、意外な時に出て來て外界を覗くことがある。例へば、郊外を歩いてゐて、道端の名もない草の花を見る時や、又は遠くの杉の木の梢の神祕的な色彩を見てゐる時に、僅かの瞬間だけではあるが、此の「えび」の幻影を認めることが出來る。それが消えた跡に殘るものは、淡い「時の悲しみ」である。

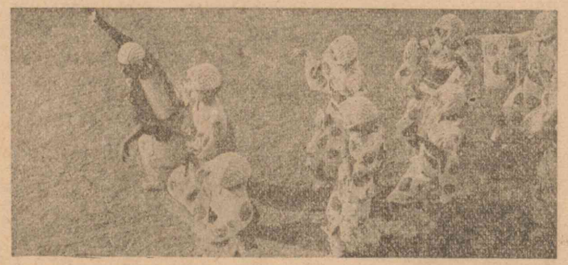
前後に

二

盆踊は此の頃はもはや無くなつたかどうか私は知らない。私が前後に唯一度盆踊を見たのは、今から二十年ほど前に、南海の或漁村でのことだつた。病氣で其處に轉地して居る或

妖精

人を見舞に行つて一晩泊つた時が、ちやうど舊曆の盆だつた。蒸暑い、蚊の多い、そして、何となく魚臭い夕靄の上を眠いやうな月が照らしてゐた。神社の森蔭の廣場に、ほんの五六人の影が踊つてゐた。どういふ人達だつたか、それはもう覺えてゐないが、唯何となく私にはお伽噺にあるやうな淋しい山中の妖精の舞踊を想ひ出させた。そして、何故だか感傷的な氣分を誘はれた。其の時見舞つた病人は、それから間もなく亡くなつた。私は今でも盆踊といふと其の夜を想ひ出すが、不思議な錯覺から、其の時踊つてゐた



阿波盆踊

田園詩的な

瀕する

妖精のやうな人影の中に、死んだ其の人の影が一緒に踊つてゐたやうな氣がして仕方がない。そして思ふ、西洋臭い文明が田舍の隅々まで擴つて行つても、盆の月夜には、何處かの山陰のやうな處で、昔からの大和民族の影が昔の踊を踊つて居るのではあるまいかと。盆踊といふ言葉には、田園詩的な、そして、感覺的な餘韻がある。併し、それはどうしても現代のものではない。其の餘韻の源に遡つて行くと、德川時代などを突拔けて、遠い〳〵古事記などの時代に到著する。盆踊のまだ行はれて居る處があれば、其處には、どこかに奈良朝以前の民族の血が若い人達の體に流れて居るやうな氣がして仕方がない。そして、それが今滅亡に瀕してゐるやうな悲しみを感ずる。

ブランギン
英國の畫家（西暦一八六七―）。

三

夏の盛に「蟲送」といふ行事が行はれる。赤裸の人間が畦道に据ゑられた大きな太鼓や鐘を力に任せて叩く音が、四方の山から反響し、家の戸障子に劇しい衝動を與へる。空には火焔のやうな雲の峰が耀いて居る。朱を注いだやうな裸の皮膚には、汗が水銀のやうに光つてゐる。

總べてがブランギンの油繪を想ひ出させる。耳を聾するやうな音と、眼を眩するやうな光の强さは、其の中に却つて澄透つた靜寂を釀成する。唯それは物の空虛なための靜けさではなくて、物の充實しきつた時の不思議な靜けさである。烈しい音波の衝動のために、害蟲が果して振るひ落され、そして、振るひ落された蟲がそれきりになるかどうか、確なことは

恐らく誰も知らなかつたらう。併し、そんなことはどうでもいゝやうな氣がする。あれは或無名の宗教の莊重な儀式と考へるべきものである。

四

高知市からあまり遠くない朝倉村に、木の丸神社といふのがある。これは齊明天皇を祭つたものだと言はれてゐる。天皇の崩御になつた九州の或地方の名が卽ち此の村の名になつてゐる。どういふ譯で此の南海の片隅の土地が天皇と結び附けられるやうになつたか、それは恐らく誰にも解るまい。それにも拘らず、かういふ口碑は人の心を三韓征伐の昔に誘ひ、そして、現代の事相に古い民俗的の背景を與へる。此の神社の祭禮の儀式は珍しいものだつた。私は子供の時分

齊明天皇　第三十七代、皇極天皇の重祚、新羅を御征討遊ばさうとして、西征の御途筑紫（福岡縣）朝倉行宮にて白雉七年（三三）崩御、御年六十八。

口碑　民俗的

に一二度見ただけだから、もう大部分は忘れてしまつたが、夢のやうな記憶の中を搜すと、こんなことが出て來る。やはり農家の暇な時期を選んだものだらう。儀式は刈株の殘つた冬田の上で行はれた。其處に神輿が渡御になる。それに從ふ村中の家々の代表者はみんな裙を著けて、傘ほどの大きな菅笠のやうな物を冠つてゐた。そして、左の手に小さな鉦をさげ、右の手に持つた木槌でそれを叩く。單調な聲、緩な拍子で「ナーンモーンデー」と唱へると、鉦の音がこれを請けて「カーンコ」と響く。どういふ意味だか解らない。或人は「南門殿還幸」を意味すると言つてゐたが、それはあまり當にならない。私は寧ろ意味の解らない方がいゝ氣がしてゐた。神輿の前で相撲がある。併し、それは相撲を取るのではなくて、相撲を

廻し

文明

取らないのである。美しい廻しを附けた力士が堂々と睨み合つて、いざ組まうとすると、衞士だか行司だかが飛出して引分け引止める。さういふことが何度となく繰返される。そして、結局相撲は取らないでお仕舞になるのだつた。これはどういふ由緒から起つた行事だか解らないけれども、見る人人の心は、遠い昔に起つた或何かしらかなり深刻な事件の微な反響のやうなものを感ずる。其の外「棒使ひ」といつて、神前で紅白の布を卷いた棒を振廻す儀式もあつたが、詳しいことはもう覺えてゐない。文明の波が潮のやうに片田舍にも押寄せて來て、固有の文化の名殘は大抵流してしまつたので、「ナーンモーンデー」の儀式もいつの間にか廢止された。學校へ行つて文明を敎はつてゐる村の青年達には、袴を著けて菅笠

塵塚

弊履

を冠つて、無意味なやうな「ナーンモーンデー」を唱へることは堪難い屈辱であり、自己を野蠻化する所行のやうに思はれたのだつた。これは無理のないことである。簡單な言葉と理窟で手早く誰にも解るやうに說明の出來ることばかりが、文明の陳列棚の上に美々しく並べられ、さうでないものは塵塚に捨てられて、其の存在さへ否定された。それと共に、無意味の中に潛む重大な意味の存在は許されないやうになつた。幾千年來傳はつた民族固有の文化の中から常に新しいものを取出して、新しくそれを展開させる人は何處にもなかつた。「改造」といふ叫び聲は、內にあるものの展開ではなくて、木に竹を接ぐやうな意味にだけ持囃された。それで、あの深切な情誼の厚い田舍の人達は、切つても切れぬ祖先の魂と影とを弊

株式

冬彦集
吉村冬彦著、隨筆集、大正十二年（一九二三）一月刊行。

履のやうに棄てて了つた。そして、自分とは緣のない遠い異國の歷史と背景が產み出した新思想を輸入してゐる。これは、傳來の家や田畑を賣拂つて、株式に手を出すのと同じ行き方である。

新思想の本元西洋へ行つて見ると、却つて日本人の眼に馬鹿馬鹿しく見えるやうな大昔の習俗や行事が、其のまゝに行はれてゐるのは寧ろ不思議である。これはどちらがいゝか、議論すると解らなくなるにきまつてゐる。さうした田舍の塵塚に朽ちかゝつてゐる祖先の遺物の中から、新しい生命の種子を拾ひ出すことが、吾々の當面の仕事ではあるまいかといふ氣もする。

（冬彦集）

正岡子規
名は常規、松山市の人、歌人、俳人、明治三十五年（一九〇二）歿、年三十六。

上野
東京市下谷區、上野公園のこと。

ゆたかに
藪―籔

おぼし
物めかす
吟興を鼓す

軍に從ひて
子規は日清戰役の從軍記者であつた。

金州
關東州の一邑。

須磨
神戸市須磨區の海岸。

家に歸り著きし時
明治二十八年（一八九五）十月。

將に暮れんとす

小園の記

正岡子規

我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて、上野の杉を垣の外に控へたり。場末の家まばらに建てられたれば、青空の庭の外に擴りて、雲行き、鳥翔る樣もいとゆたかに眺めらる。初めてこゝに移りし頃は、僅かに竹藪を開きたる迹とおぼしく、草も木も無き裸の庭なりしを、やがて家主なる人の小松三本を植ゑてやゝ物めかしたるに、鄰の老媼の與へたる薔薇の苗さへ植添へて、四五輪の花に吟興の鼓せらるゝこと多かりき。

一年軍に從ひて金州に渡りしが、その歸途病を得て、須磨に、故鄕に、思はぬ日を費し、半年を經て家に歸り著きし時は、秋將

さびまさる

三徑荒ニ就ク
陶淵明の歸去來辭に「三徑荒ニ就イテ、松菊猶存ス。」とある。

口ずさむ

芳葩

に暮れんとする頃なり。庭の面去年より遙にさびまさりて、白菊の一もと二もとねぢくれて咲亂れたる、この景に對して靜かに昨日を思へば、萬感そゞろに胸に塞がり、辛き命助かりて歸りし身の衰は、唯この嬉しさに勝たれて、思はず「三徑荒ニ就ク。」と口ずさむも涙がちなり。あり觸れたるこの花、狹苦しきこの庭の、かくまで人を感ぜしめんとは、曾て思ひ寄らざりき。ましてこれより後、病いよ〳〵募りて脚立たず、門を出づる能はざるに至れる今、小園は余が天地にして、草花は余が唯一の詩料となりぬ。余をして幾何か獄窓に呻吟するにまさると思はしむるものは、この十歩の地と數種の芳葩とあるが爲に外ならず。

次の年、春漸く催して、鳥の聲いと麗に聞えしある日、病の窓

を開きて端近くにじり出で、讀書に勞れたる目を遊ばすに、いきいきとしたる草木の生氣は、手のひら程の中にも動きて、まだ薄寒き風のひや〳〵と病衣の隙を侵すもいと心地よく覺ゆ。これも鄰の老媼より貰へりといふ萩の刈株、寸ばかりの綠をふいて、逞しき秋の色も思はる。眞晝過より夕影椎の樹に落つるまで、何を見るとなく、醉うたるが如く、勞れたるが如く、うつとりとして日を暮すことさへ多かり。

今まで病と寒氣とに惱まされて、弱り盡くしたる余は、この時新に生命を與へられたる赤子の如く、これより萩の芽とともに健全に育つべしと思へり。折ふし黃なる蝶の飛來りて垣根に花をあさるを見ては、そゞろに我が魂のおのづから動き出でて、ともに花を尋ね、香を探り、物の芽にとまりて、しばし

惘然として

踏みしだく

羽を休むるかと思へば、低き杉垣を越えて鄰の庭をうちめぐり、再び舞戻りて松の梢にひら〳〵、水鉢の上にひら〳〵、一吹風に高く吹かれながら向かふの屋根に隱れたる時、我にもあらず惘然として自失す。忽ち心づけば、身に熱氣を感じて心地なやましく、内に入り障子たつると共に布團引被れば、夢にもあらず、幻にもあらず、身は廣く限無き原野の中にありて、今飛去りし蝶と共に狂ひまはる。狂ふにつけて、何處ともなく數百の蝶の群れ來て遊ぶをつら〳〵見れば、蝶と見しは皆小さき神の子なり。空に響く樂の音につれて、彼等は躍りつゝ舞上り飛行くに、我も後れじと、茨・葎のきらひなく踏みしだき、躍り越え、思はず野川に落ちしよと見て夢覺むれば、寢汗したたかに襦袢を濕して、熱は三十九度にや上りけん。

げんげ（れんげ）

げんげの花盛過ぎて時鳥の空に訪るゝ頃は、赤き薔薇・白き薔薇咲滿ちて、かんばしき色は見るべき趣なきにはあらねど、我が小園の見所は、まこと萩・芒のさかりにぞあるべき。今年は去年に比ぶるに、萩の勢強く、夏のはじめの枝振さへいたく茂りて、末頼しく見えぬ。葉の色も去年のやゝ黄ばみたるには似ず、綠いと濃し。空晴れたる日は、椅子をそのほとりに据ゑさせ、人に扶けられやうやくその椅子にたどりつき、氣晴しがてら萩の芽に附きたる小さき蟲を取りしことも、一度二度にはあらず。

桔梗・撫子は實となり、朝顔は花のやゝ少くなりし八月の末より待ちに待ちし萩は、一つ二つ綻び初めたり。飛立つばかりの嬉しさに、指を折りて、あすは四つ、あさつては八つ、十日目

思ひまうく

日闌く

心もとなし

ひたと

（南）

朝顔の垣や上野の山かつら

うしろ手に百日草や萩の花

枝折れて野分の後の萩淋し

邪魔になる松を伐らばや草の花

雨だれの秋海棠にかゝりけり

萩低く芒の風をかぶりけり

萩も水浴みに行く道一つ

葉鶏頭畫照草を引きにけり

家主が植ゑてくれたる松の秋

鶏頭を貫うて植ゑぬ野分過

明月の今年は遅き芒かな

二度生えの低き桔梗や花多き

鶏頭や不折がくれし葉鶏頭

引き殘す牡丹松葉や秋の風

朝顔の花木深しや松の中

おしろいは妹のものよ俗な花

朝顔にからむ隣の瓢かな

藪澤の竹も久しや庵の秋

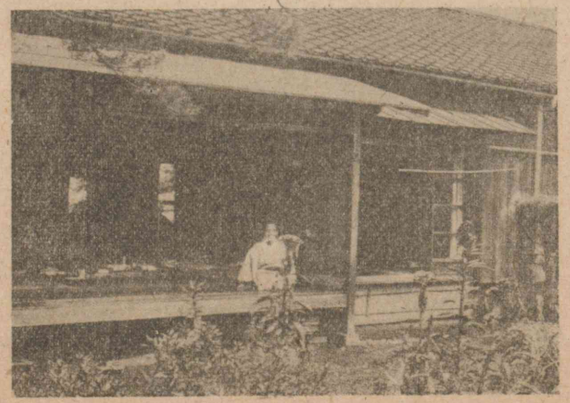
蓑笠を掛けて夜寒の書齋かな

推の實を拾ひに來るや隣の子

には千にやならんと思ひまうけし程こそあれ、ある夜野分の風烈しく吹出でぬ。安からぬ夢を結びて、あくる朝、日闌けて眠より覺むれば、庭に何やらのゝしる聲す。心もとなく這出でて、何ぞと問ふ。今までさしも茂りたる萩の枝、大方折萎れたるなりけり。ひたと胸つぶれて、いかにせましと思へど、せんなし。

知りせば

かくと知りせば、枝に杖立置かましをなど悔ゆるも愚なりや。瓦吹飛ばしたる去年の野分にだにかうはならざりしを、今年の風は萩のために方角や悪しかりけん。此の日は晴れわたりやゝ秋氣を覺え初めしが、余は例の椅子を庭に据ゑさせ、バケツと金盥に水を湛へて、折殘りたる萩の泥を洗へりしかど、空しく足の痛みを增したるばかりにて、泥つきたる枝のさきは、蕾腐りて終に花咲くことなかりき。園中何事もなきは、たゞ松と芒とのみ。



小園の一隅

鷗外漁史
森林太郎、醫學博士、文學博士、大正十一年（一九二二）歿、年六十一。
漁史百日草

葉雞頭

必定畫照草

去年の春彼岸やゝ過ぎし頃と覺ゆ。鷗外漁史より草花の種幾袋贈られしを、直に播きつけしが、百日草の外は何も生えずしてやみぬ。中にも葉雞頭のほしかりしを、いと口惜しく思ひしが、何とかしけん今年夏の頃、怪しき芽をあらはしし ものあり。去年葉雞頭の種を埋めしあたりなれば、必定それなめりと、竹を立てて大事に育てしに、果して二葉より赤き色を見せぬ。嬉しくてあたりの畫照草など引きのけ、やう〳〵尺餘になりし頃、野分荒れしかば、これぱかり氣遣ひしに、思の外に萩は折れて葉雞頭は少し傾きしばかりなり。扶け起して竹杖に縛りなどせしかば、恙なくて今は二尺ばかりになりぬ。痩せてよろ〳〵としながら、なほ燃ゆるが如き紅しだれていと美し。二三日ありて、向かふの家より貰ひ來れりとて、肥太

朝まだきに不折子
中村不折、洋畫家、書家、慶應二年（一八六六）生。

創造

みまかる

子規全集
二十二卷、子規の全作品を集む、昭和四年（一九二九）六月―昭和六年十一月刊行。

りたる雞頭四本ばかり植添へたり。その次の日なりけん、朝まだきに裏戸を叩く聲あり。戸を開けば、不折子が大きなる葉雞頭一本引提げて來れるなりけり。朝霧に濡れつゝ手づから植ゑて去りぬ。雞頭・葉雞頭のかゞやくばかり華やかなる秋に壓されて、萩ははや散りがちなるもあはれ深し。薔薇・萩・芒・桔梗などをくれて、余が小樂地の創造に力ありし鄰の老媼は、その後移りて他に在りしが、今年秋風に先立ちてみまかりぬとぞ聞えし。

ごて〳〵と草花植ゑし小庭かな

（子規全集第十卷）

瀧澤馬琴
名は解、別號は曲亭馬琴・著作堂主人等、江戸（東京市）の人、小説家、嘉永元年（一八五八）歿、年八十二。

殤子

物忌

九水垢離

瀧澤馬琴

犬塚番作は年來の志願稍遂げて、男兒既に出生し、母も子もいとすくよかに、産室撤むる頃になりぬ。「さて兒の名を何とか呼ばん。」と、女房手束に語らへば、手束暫く打案じ「よに子育てのなき者は男兒なれば女の子とし、女の子には男名つけて養ひ育つれば、恙なしとて、しかする人も稀には侍り。我が夫婦に幸なくて、男兒三人擧けしかど、皆殤子にてなくなりたるに、この度も亦男兒なれば、一しほ心弱くなりて、おもひやりのみせられ侍り。この子が十五にならん頃まで女子にして育まば、恙あらじと思ひ侍り。その心して名つけたまへ。」といへば、番作うちほゝ笑み「死生命あり、名の咎ならんや。物忌多き世の僻事いと信けがたき筋なれども、おん身が心やりにもならば世に從ふもわろきにあらず。古語に長きをしのといふ。わが子の命長かれと祝の心もて、その名を信乃とよぶべきか。」といふ。是より手束は、信乃が衣裳を、女服にせざるもなく、三つ四つの頃に及びて髫髪おくほどにもなれば、櫛さゝせ簪さゝせて「信乃よ〳〵。」と呼びしかば、知らざるものは、この兒を女の子ならんと思ひけり。

うく
心やり
わろき（わるき）

信乃
里見八犬士の一人となる。

里見八犬傳刊本

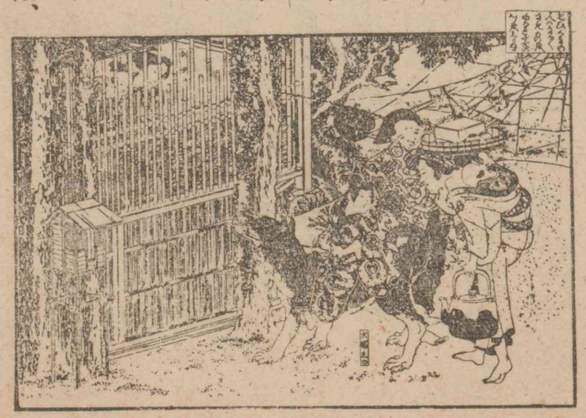
さる程に、信乃ははや九つになりしかば、骨逞しく膂力あり。

一かさ
印地打
鍾愛す
總角
句讀
拳法

げに世の常なる人の子が、年十一二になるものより、身の丈一かさ高かるに、なほ女服著せられて、雀小弓に紙鳶・印地打・竹馬など、よろづの遊もあら〳〵しきまでおのづから武藝を好めば、番作、ます〳〵鍾愛して、朝には里の總角と共に手習させ、夕には儒書軍記の句讀を授け、又、或時は試みに劍術・拳法を教ふるに、素より好む道なれば、その技の進むこと親すらしば〳〵舌を掉るひて、末たのもしく思ひけり。父はかくても母手束は、わが子のいともさかしきに自らなる孝心の擧動に顯れて、親さへ人の譽むるまでに、文の道・武の藝、年にはませてその器にかなへば、もし短命にあらずやと、彼を思ひ、此を思ふに、とにかく心安からねば、夫を諫め、子を禁め、「習ひ學ぶはわろきにあらねど、事おほかたにせよ。」といふ。さはれ、信乃が心ざま、よの

うらうへ
目影
瀧野川
石神井川の一名、東京市瀧野川區瀧野川町にある小流。

童子とはうらうへにて、母の目影をしのびても、竹刀を手にとらざる日もなく、馬にさへ騎り習はんと思ふ心のつきたれども、田舍は小荷駄のみにして、借馬などいふものはあらず。然るに信乃が生まるゝ頃、母親手束が瀧野川なる岩屋詣での歸るさに、ゐて來つる狗の子は、信乃と共に大きくなりて、今年は既に十歳なり。この狗、背は墨より黑く、腹と四足は雪より白くて、馬に所謂驂なれば、その名をやがて四白とも、又、與四郎とも呼ぶ程に、年來信乃に



驂に乘る信乃（刊本挿繪）

御法
體たらく
鍼灸
まどろむ
醫師がり
よもやま

よくなれて、打擲かれても怒ることなく、手につきその意に隨ふにぞ、信乃は件の輿四郎に繩手綱をかけて打乘れば、狗は主の心を得て、足搔を早めて幾返りかす。誰教へねども、その乘鞍・手綱捌きの御法に稱ふを、見るもの思はず佇みて、技と姿の似げなきに、腹をかゝへて笑ふもあり、「又この童子が體たらく、只者にはあらじ。」とて、賞嘆するも多かりけり。

さる程に、今年秋の頃よりして、手束は、心地例ならず、病の床に臥ししより鍼灸・藥餌の驗なく、冬の初にいたりては、日に日に弱るばかりなれば、番作は、いとゞしく眉打開くよしもなく、夜とて安くはまどろまず。信乃は又朝な〳〵醫師がり往き來しつゝ、藥をすゝめ腰をさすり、よもやまの物語して母の徒然を慰むるに、思はず涙目に盈ちて、やるかたなきを見る母は、

ふたがり（ふさがり）
鳩尾
かたみに
いそし
はつか（わづか）
良人—妻
しどけなし
つひにゆく
つひに行く道とはかねてきゝしかど昨日今日とは思はざりしを。（在原業平—古今集）
祈子
奇瑞

胸ふたがりて泣顏を隱すよしなく、鳩尾を撫でて痞に紛かす。親子かたみに思ふこと、言はねどしるき孝行・慈愛、心ぞ思ひやられたる。

かくてそのあけの朝、信乃は藥取にとて、いそしく出でてゆきし後、番作は妻の枕邊にて、小鍋に粥の鹽加減して、半ば開きし扇の風に火を起させて居たりしかば、手束ははつかに頭を擡げ、「常にはあらぬわが良人の、火焚き・水汲みしどけなく、竈働きし給ふこと、心苦しき限りに侍り。しかのみならず、十にも足らぬ信乃が、この頃大人しく親に仕へて夜の目合はせず。かくまでに賴しき良人とわが子の介抱を受けても、つひにゆく道の別と思ひ侍りかし。抑、わらはがこの度の病故ありぬべきことになん。素より信乃は祈子にて、しかじかの奇瑞あ

親はづかしきもの
定業
ねぎごと
襁褓
神送り
婆婆あたら

り、かくて擧けしひとり子なれども、年にませたる智は長けて、親はづかしきものに侍れば、殤子になくせし兄等に懲りて、もし短命にあらずやと思ふは昨日今日ならず。『彼が定業脱れがたくて生ひ立たぬものならば、母が命を代へさせ給へ。』と、瀧野川なる岩屋殿、神に佛に年來より、ねぎごと竟に空しからで、信乃は襁褓の中よりして、蟲氣もあらず風ひかず、輕き疱瘡の神送り、童の疫をし果てても、男兒には怪我ありといふ、七つの峠越えさせて、今年わらはが身まからば、わが子の行末念願成就、代る命は惜しからで、悲しきは只死別れ、ひとりは缺くる垂乳女の、母はなくとも父御だに、よにましまさば光もて、何暗からず生ひ立ちなん。久しくもをらぬ婆婆と思へば、あたら財を費して、藥たべんは無益に侍り。打捨ておき給ひね。」と、いひ

涙さしぐむ
いきの緒
巳のころ

あへず涙さしぐみて、いきの緒細る覺悟の言の葉、脆きは袖の露霜に、弱り果てたる秋の蝶、片羽もがるゝ思なり。番作しばしば嘆息し、「異なる事を聞くものかな。わが子の命に代らんとて代らるゝものならば、世に子を喪ふ親はあらじ。さる惑よりこそ病みもすれ。よしなく物を思はんより、藥を服み粥をも啜りて、氣長く保養し給へ。」と、理盡くして諭しけり。

冬の日なれば短くて、はや巳のころになりしかど、常にもあらで信乃はかへらず。「彼、道草を食ふものにあらず。いかにしつらん。」と、子を思ふ親の心はおちつかず、番作は外の方に出でて見んとて障子を開けば、思ひがけなく緣側に、藥のかよひ筥はあり。「こは訝し。」と、紐ときて、蓋かいとれば藥もあり。さもこそと片頬に笑みつゝ、件の筥を携へて、いそがはしく内に

氣鬱

おちゐる

片心

餓ゑ（餓う。）

を。る

板金剛

入り「手束よ、藥は彼處にあり。いつの程にか信乃は還りて、氣鬱をはらしに出でにけん。實に童心ぞかし。御身が病の初より、おのが事にはかりそめにも外に立つこともなかりしに、いかばかり面白きもの見かけてか、還りたる由をも告げずまた出でたり。」といふに、手束は稍おちゐて「たま〳〵の事なるに、かならずな叱り給ひそ。還るに程は待らじ。」といひつゝも、その顏見ねば片心にぞかゝりける。

「かくてはや未の歩過ぎにけん、日影斜になる頃まで、待てども待てども信乃は還らず。「よしや遊に耽りたりとも、餓ゑなば興も盡くべきに、物をも食はで何處にをる。心得がたき事なり。」と、父すらいへば、母はなほ重き頭を幾度か擧げて眺むる外の方に、板金剛の音すれば、それかとぞ思ひ誑されて、浪速の

人のあし

小六月

巢鴨

五五頁地圖參照。

魚籠

いませる

神谷川

瀧野川の一名か。

浦に刈るといふ、人のあしさへ恨みけり。妻が喞てば番作も、立つて見、居て見、まちわびて、思はずも嘆息し「わが足舊の如くならば、只一走りに走り廻りて、必ず索ねてゐて還らんに、日影短き小六月、夕日を見つゝ杖に縋りて、何地まで行かるべき。さりとて暮れなば愈便なし。巢鴨までも。」と、一刀を挿して竹杖つき試み、早外の方に出でんとす。

「かゝる處に、番作が背戸の向かひなる百姓に糠助と呼ばるるもの、右手に一條の釣竿と一つの魚籠を携へて、左手に信乃を扶けひき、いそがはしく詣來つゝ、今外の方に出でんとする番作と面をあはして、から〳〵と打笑ひ「犬塚氏か、そこにいませる。秋の稼も爲果てたる骨休めにと、われとわが一日の暇を賜はり、けふは未明にうかれ出でて、神谷川に雜魚釣暮し、瀧

不動の瀧　瀧野川成就院の境内にある。（五五頁地圖參照）
ふためく
坊
ゆきつ
神符
洗米
子なり　親なり
罷る

野川を歸り來れば、こゝなる息子が不動の瀧に水垢離取りて、身は冷え徹り、息も絶ゆべき有樣を見つけし時は膽潰れて、あわてふためき引出し、そがまゝ坊へゐてゆきつ、藁火に煖め、藥を服ませ、法師ばら諸共に、いたはること半時ばかり、はじめてわれに復りしかば、湯漬貰うて腹を肥させ、事のもとを尋ぬれば、母の大病平癒の祈禱に、水垢離をとりしといふ。十にも足らぬ童には、たぐひ稀なる大孝行。法師ばらも感心せられて、求めざれども當病平癒の神符・洗米を賜はりぬ。件の瀧は寺へ遠くて、わが外に人知らざりき。實に危き事なりし。かくまで賢しき子なり、親なり、佛神見はなち給はんや。母御は本復疑なし。いざ子寶を受取り給へ。暮れかゝれば、はや罷るなり。病む人によく心得てよ。用あらば背戸口から、竹法螺

和子
足引の
からに
祈らでも　心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神やまもらん。菅原道眞の詠と傳ふ。
家尊
家母

鳴らして呼給へ。和子よ、明日はあそびに來よ。この魚炙りて食ませんに。」と、おのがいふ事いひ誇り、人の挨拶聞果てず、内にも入らでかへりけり。

「さてはとばかり番作は、わが子の肩を杖にかへ、あがり框を足引の山路越えたるこゝちして、そがまゝ奥に知らすれば、手束も事の趣を洩聞くからに、病苦を忘れて、わが子をほとり近く侍らせ「信乃、よくものをこゝろ得よ。孝行つくすも程あるものなり。身をあやぶめて怪我あらば、親の歎はいかなるべき。かくては孝が不孝ぞかし。親いとほしと思ふ子の爲には、祈らでも神は守り給はん。危きわざをし給ふな。」と諭せば、信乃は涙ぐみ「宣ふところ心得侍り。今朝醫師がり赴きて、藥賜はりて還りし折、家尊に家母の物がたり、信乃の命が長かれ

贄

ついゐる

さだめつ

そ　と

糠助男

よゝと

と、勿體なくもわが母は、命を贄に神々に祈らせたまひし驗にや、長き病に臥したまふと宣はせしを立聞きて、哀しきこと限り侍らず。涙に濡るゝ片袖を、泣聲たてじと噬みしめて、緣側についゐたりしが、親のねぎごと驗あらば、わがねぎごとも驗ありなむ。いかでこの身を贄にして母の命に代らんと思ひさだめつ、もてかへりし藥を其處にそと置きて、年來母御の信じ給ふ瀧野川に走りゆき、岩屋の神に思ふ事繰返したる瀧の絲、心強くも身を打たせ、一たびは死に侍りけん、その後の事知らず侍り。さてあるべきにゆくりなく、糠助男に妨せられて生きて還るは、ねぎごとを神は受けさせ給はぬにや、いと口惜しく、悲しく侍り。」といひかけて、目をおし拭へば、手束はよゝと泣沈み「よに子を持たぬ親はなけれど、けふ死するとも、わが身

水屑

はふる

よしもなし

願だて

南總里見八犬傳

五十三卷・百六册、馬琴二十八年間書續けて完した苦心の大作。成した時室町時代末期里見家の興亡に材を取り、仁・義・禮・智・忠・信・孝・悌の八德をあらはした八犬士を活躍させた小說、文化十一年（一八一四）—天保十二年（一八四一）刊行。

近松半二

本姓穗積氏、俗稱以助、大阪の人、淨瑠璃作者、天明三年（一七八三）歿、年五十九。

李笠翁

支那淸時代の戲曲作家、笠翁は號。

著作堂一夕話

馬琴が享和二年（一八〇二）の夏京畿に遊び歷したる際の見聞記である。

ばかり幸あるものはなきぞとよ。八つ九つの幼心に賢しや親に代らんと、祈る誠を神々の受給へばこそ、瀧壺の水屑にならで還りけめ。かくまでに命運強きわが子の上を見るからに、行末さへに賴しく、歡ばしさに涙のみ、はふれ落ちて禁めがたし。母が御身にかはらんとて祈りしは迷なり。驗あるべき事ならぬに、かへすがへすもよしもなき願だてな爲給ひそ。」と、涙の隙に諭しけり。

（南總里見八犬傳）

近松が遺すところの硯あり。後、近松半二に傳ふ。その硯の蓋に漆して「事ヲ凡近ニ取リテ義ヲ勸懲ニ發ス」の九字をしるす。これは笠翁の語をとれり。近松、小說にこゝろを寄せしこと是にて知らる。この人は實に本邦の李笠翁なり。

（瀧澤馬琴—著作堂一夕話）

薩摩守忠度　平忠盛の子、清盛の弟、武將、歌人、壽永三年（一八四）戰死、年四十一。
童　五條の三位俊成卿　藤原俊成、定家の父、歌人、千載和歌集撰者、元久元年（一八六四）薨、年九十一。
落人　飛んで（飛びて）
仔細　苦しかるまじ

10 故郷の花

薩摩守忠度はいづくよりか歸られけん、侍五騎、童一人、我が身共に七騎取つて返し、五條の三位俊成卿の宿所におはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度」と名のり給へば、「落人歸り來たり。」とて、其の内騒ぎあへり。薩摩守急ぎ飛んで下り、自ら高らかに宣ひけるは、「別の仔細候はず。三位殿に申すべき事あつて、忠度が參つて候。門を開かれずとも、此の際まで立寄らせ給へ。」と宣へば、俊成卿「さる事あるらん。其の人ならば苦しかるまじ。入れ申せ。」とて門を開けて對面あり。

事の體何となうあはれなり。薩摩守宣ひけるは、「年來申し承つて後、愚ならぬ御事に思ひ參らせ候へども、此の二三年は

候はんずらん

京都の騒、國々の亂れ、而も當家の身の上の事に候間、疎略を存ぜずといへども、常にまゐり寄る事も候はず。君既に帝都を出でさせ給ひぬ。一門の運命、今日早盡き候ひぬ。撰集のあるべき由承りしかば、生涯の面目に、一首なりとも御恩を蒙らうと存じて候ひしに、かゝる世の亂れ出で來て、其の沙汰なく候條、唯一身の歎と存じ候。世靜まり候ひなば勅撰の御沙汰候はんずらん。これに候ふ卷物の中

忠度・俊成を訪ふ

さりぬべきもの
こそ・候はんずれ

鎧の引合はせ
引き

ゆめ〳〵
疎略を存ず
存ずまじう。（まじく）

指いて（指して）

にさりぬべきもの候はば、一首なりとも御恩を蒙つて、草の蔭にても嬉しと存じ候はば、遠き御守りとこそ成りまゐらせ候はんずれ。」とて、日來詠み置かれたる歌どもの中に秀歌と思しきを、百餘首書集められたりける卷物を、今はとて打立たれける時、これを取つて持たれたりしが、鎧の引合はせより取出でて俊成卿に奉る。三位これをあけて見て、「かゝる忘れ形見を賜はり置候ひぬる上は、ゆめ〳〵疎略を存ずまじう候。御疑あるべからず。さても、唯今の御わたりこそ情も勝れて深う、哀も殊に思ひ知られて、感涙抑へ難うこそ候へ。」と宣へば、薩摩守悦んで、「今は西海の浪の底に沈まば沈め、山野に屍をさらさばさらせ、浮世に思ひ置く事候はず。さらば、暇申して。」とて馬に打乗り、冑の緒をしめ、西を指いてぞ歩ませ給ふ。三位後を

前途程遠シ
大江觀綱作、和漢朗詠集下卷餞別の部に見える。

雁山
雁門山の略、支那山西省の北部にある。

千載集
二十卷、勅撰集の一、壽永二年（一八四三）藤原俊成が後白河法皇の院宣に依つて撰したもの。

ありし有樣

勅勘

さゞ浪や
平家物語
十二卷、著者未詳、平家一門の榮華と沒落とを敍した軍記物語、成立年代は承久（一八七九—一八八一）以前であるといふ。

遙に見送つて立たれたれば、忠度の聲と覺しくて、「前途程遠シ、思ヲ雁山ノ夕ベノ雲ニ馳ス。」と、高らかに口ずさみ給へば、俊成卿も、いとど名殘惜しうおぼえて、涙を抑へて入り給ふ。

其の後、世靜まつて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有樣言置きし言の葉、今更思ひ出でて哀なりければ、彼の卷物の中に、さりぬべき歌幾らもありけれども、勅勘の人なれば、名字をば顯されず、「故郷の花」といふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ、讀人不知と入れられける。

さゞ浪や志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな

其の身朝敵と成りにし上は、仔細に及ばずといひながら、恨めしかりし事どもなり。

（平家物語）

義朝　源爲義の長男、永暦元年（一八〇）歿、年三十八。
藏人右少辨　秦野次郎　名は延景。
勅　諚
傅　傅—傅—博
當　腹
相構へて
船　岡　今の京都市上京區にある丘陵。

力なし

二乙　若

さるほどに、内裏よりすなはち義朝を召され、藏人右少辨資長朝臣を以て仰せ下されけるは、「汝の弟どもの未だ多くあるなるを、たとひ幼くとも、女子の外は皆尋ねて失ふべし。」となり。宿所に歸つて秦野次郎を召してのたまひけるは、「あまりに不便なれども、勅諚なれば力なし。母か傅か抱きて山林に逃隱れたらむはいかゞせむ。六條堀河の宿所にある當腹の四人をばすかし出して相構へて道のほどわびしめずして、船岡にて失へ。」とぞきこえける。

延景難儀のお使かなと心うく思へども、主命なれば力なし。涙を袖に收めつゝ、泣く〳〵輿を舁かせて、かの宿所へぞ赴き

入道殿　爲義。
まゐつて
守　殿　下野守源義朝。
つゝましし
雲林院　今京都市上京區船岡大德寺境内に舊址がある。（七〇頁地圖參照）
羊のあゆみ　譬ヘバ屠陀羅羊ヲ驅リテ屠所ニ就カシムルガ如シ、歩歩死地ニ近ヅク、人命亦是ノ如シ。（摩耶經）

ける。母上は折節物詣での間なり。公達は皆おはしけり。兄をば乙若とて十三、次は龜若とて十一、鶴若は九つ、天王は七つなり。此の人々延景を見つけてうれしげにこそありけれ。秦野次郎「入道殿のお使にまゐつて候。殿は十七日に比叡山にて御さまをかへさせ給ひて、守殿の御もとへ入らせ給ひしを、世間も未だつゝましとて、北山雲林院と申す處に忍びてわたらせ給ひ候が、公達の御事おぼつかなくおぼしめし候間、御見參に入れ奉らむために、具し奉つて參らむとてお迎へにまゐつて候。」と申せば、乙若出であひて、「まことに樣變へておはしますとは聞きたれども、軍の後は未だお姿を見奉らねば、誰も誰も皆戀しくこそ思ひはべれ。」とて、我先にと輿に爭ひ乘られけるこそあはれなれ。これを冥途の使とも知らずして各輿

大宮
大宮通。

大殿
爲義。
御承り
八郎御曹司
源爲朝。
四郎左衛門
源頼賢。
九郎
源爲仲。
すかす

どもに向かひつゝ、「急げや急げ。」と進めける。羊のあゆみ近づくを知らざりけるこそはかなけれ。大宮を上りに、船岡山へぞ行きたりける。峰より東なる所に輿舁きすゑて、いかがせましと思ふところに、七つになる天王走り出でて、「父はいづくにましますぞ。」と問給へば、延景涙をながして、しばしは物をも申さざりしが、やゝあつて、「今は何をか隠し参らすべき。大殿は守殿の御承りにて、きのふの曉斬られさせ給ひ候ひき。御舍兄たちも、八郎御曹司の外は、四郎左衛門殿より九郎殿まで五人ながら、ゆふべ此の表に見えて候山もとにて斬奉り候ひぬ。君たちをも失ひ申すべきにて候。『相構へてすかし出し参らせて、わびしめ奉らぬやうに。』と、仰せつけられ候間、入道殿のお使とは申しはべるなり。おぼしめすこと候はば、延景に

下野殿
義朝。

不覺

不當人

仰せ置かせ給ひて、みなお念佛候べし。」と申せば、四人の人々これを聞き、みな輿より下り給ふ。九つになる鶴若殿、「下野殿へ使を遣はして、『如何に吾等をば失ひ給ふぞ。四人を助け置給はば、郎等百騎にもまさりなむずるものを。』このよし申さばや。」とのたまへば、十一歳になる龜若殿、「まことに今一度人を遣はしてたしかに聞かばや。」と申されける所に、乙若殿生年十三なるが、「あな、心うの者どもの言甲斐なさや。われらが家に生まるゝものは、幼けれども心はたけしとこそ申すに、かく不覺のことを宣ふものかな。世のことわりをもわきまへ、身の行末をも思ひ給はば、六十になり給ふ父の病氣によつて出家遁世してたのみて來り給ふをだに斬る程の不當人の、まして我々を助け給ふことあらじ。あはれ、果敢なき事し給ふ守殿かな。

和讒

な・そ

一所懸命の領地
一所懸命（一生懸命）

これは清盛が和讒にてぞあるらむ。多くの弟を失ひはてて、只一人になして後、事のついでに亡さむとぞはからふらむを覺らず、只今わが身も失せたまはむこそ悲しけれ。二三年をも過し給はば、幼かりしかども、乙若が船岡にてよくいひしものをと、汝等も思ひ合はせむずるぞとよ。さても、下野殿討たれ給ひて後、忽に源氏の世絶えなむことこそ口惜しけれ。」とて、三人の弟たちにも、「な歎き給ひそ。父も討たれ給ひぬ、誰か助けおはしまさむ。兄たちも皆斬られたまひぬ。情をかけ給ふべき守殿は敵なれば、今は定めて一所懸命の領地もよもあらじ。されば命助りたりとも、乞食・流浪の身となりて、こゝかしこにまよひ行かば『あれこそ爲義入道の子どもよ。』と、人々に指をさゝれむは、家のためにも恥辱なり。父戀しくば、たゞ西

南無
往生す
ひとつ蓮
おとなしやかに

内記平太
名は政遠。

撫ではだく

に向かつて南無阿彌陀佛と唱へて、西方極樂に往生し、父御前とひとつ蓮に生まれあひたてまつらむと思ふべし。」と、おとなしやかにのたまへば、三人の公達各西に向かつて手をあはせ、禮拜しけるぞあはれなる。これを見て、五十餘人の兵も、みな袖をぞぬらしける。

此の公達に、各一人づつ傅どもつきたりけり。内記平太は天王殿の傅、吉田次郎は龜若、佐野源八は鶴若、原後藤次は乙若殿の傅なり。さし寄つて髪結ひあげ、汗拭ひなどしけるが、年來日來宮仕へ、朝夕に撫ではだけたてまつりて、只今をかぎりと思ひける心どもこそ悲しけれ。されば、聲をあげて叫ぶばかりにありけれども、幼き人々を泣かせじと、おさふる袖のひまよりも、あまる涙の色深く、包むけしきもあらはれて、思ひや

おぢ(おづ)

いし

さこそ斬られむずらめ

ほかね

果報少し

かねて

るさへあはれなり。

乙若、延景に向かつて、「われこそ先にと思へども、あれらが幼心におぢ怖れむも無慚なり。また言ふべきことも侍れば、あれらをさきに立てばや。」とのたまひければ、秦野次郎太刀を拔いて後へ廻りければ、傅ども、「御目を塞がせたまへ。」と申して、皆のきにけり。即ち三人の首まへにぞ落ちにける。乙若これを見給ひて、少しも騷がず、「いしう仕りつるものかな。われもさこそ斬られむずらめ。さてあれはいかに。」とのたまへば、ほかねを持たせてまゐりたり。手づから此の首どもの血のつきたるを押拭ひ、髪かきなで、「あはれ、無慚の者どもや。かほどに果報少く生れまけむ。只今死ぬる命より、母御前のきこしめし歎き給はむその事を、かねて思ふぞたとしへなき。『乙若

八幡

石清水八幡宮。(六頁參照)

片恨

たぶ

は命を惜しみてや後に斬られける。』と、人いはむずらむ。全くその儀にてはなし。かやうの事をいはむにつけても、亦わが斬られむを見むにつけても、留りたる幼き者のまた泣かむも心苦しくていはぬなり。母御前のけさ八幡へ詣で給ふに、『われもまゐらむ。』と申せば、皆『まゐらむ。』といへば、『具せば皆こそ具せめ、具せずば一人も具せじ、片恨に。』とて、我等が寢たる間に詣でたまひしが、下向にてこそ尋ね給ふらめ。我等かゝるべしとも知らざりしかば、思ふ事をも申し置かず、形見をも參らせず、只入道殿のよび給ふと聞きつる嬉しさに、急ぎ輿に乘りつるばかりなり。されば、これを形見に奉れ。」とて、弟どもの額髪切りつゝ、我が髪を具して、もし違ひもやせむずるとて、別々に包み分けて、各その名を書きつけて、秦野次郎にたびにけり。

よな

一世の契

「又、ことばにて申さむずるやうはよな。『けさ御供に參りなば、遂には斬られ候とも、最期の有樣をば、互に見もし見え參らせ候はむずれども、なか〳〵互に心苦しき方も侍らむ。お留守に別れ奉るも、一つの幸にてこそ侍れ。此の十年餘りの間は、かりそめに立ちはなれ參らすることも侍らぬに、最期の時しも御見參に入らねば、さこそ御心にかゝり侍るらめなれども、かつは八幡の御はからひかとおぼしめして、いたくな歎かせおはしまし候ひそ。親子は一世の契と申せども、來世は必ずひとつ蓮に參りあふやうにお念佛候べし。』いまはこれらが待遠なるらむ、とく〳〵。」とて、三人の死骸の中へわけ入つて、西に向かひ念佛三十遍ばかり申されければ、首は前にぞ落ちにける。四人の傅ども急ぎ走り寄り骸を抱きつゝ、天に仰ぎ地に

をめく

庄

かげろふ

伏して、をめき叫ぶもことわりなり。まことに涙と血と相和して流るゝを見る悲しみなり。

内記平太は、直垂の紐を解きて、天王殿の身を我が肌に當てて申しけるは「此の君を手馴れたてまつりしより後、一日片時も離れ參らすることなし。我が身の年の積ることをば思はず、早く人と成らせ給へかしと、あけくれ思ひてはぐくみまゐらせ、月日の如く仰ぎつるに、只今かゝる目を見ることの心うさよ。常は我が膝の上にゐたまひて、髭を撫でて、『いつか人となりて、國をも庄をも設けて知らせむずらむ。』とのたまひしものを、うたゝねの寢覺にも『内記々々。』と呼ぶお聲、耳の底にとゞまり、只今のお姿まぼろしにかげろへば、さらに忘るべしとも覺えず。これより歸りて命生きたらば、千年萬年を經べきや。

死出の山
三途の河
介錯
恪勤
死にけり
圓覺寺
今はない、洛東岡崎町の南、廣道の西に圓覺寺と字する地がある、これがその址である。
保元物語
三卷、著者未詳、或は奏室時長の作といふ、保元の亂の顚末を記した軍記物語。

死出の山・三途の河をば誰かは介錯申すべき。おそろしくおぼしめさむにつけても、まづ我をこそ尋ね給はめ。生きて思ふも苦しきに、主の御供仕らむ。」といひもはてず、腰の刀を拔くまゝに、腹かき切つてぞ失せにける。恪勤（かくこ）の二人ありけるも「幼くおはしましかども、情深くおはしつるものを、今は誰をか主と賴むべき。」とて、刺違へて、二人ながらに死にけり。これ等六人が志類なしとぞ申しける。同じく死する道なれども、合戰の庭に出でて、主君と共に討死し腹を切るは常の習なれども、かゝる例は未だなしとて譽めぬ人こそなかりけれ。

此の首ども渡すに及ばず、あまりに父を戀しがりければとて、圓覺寺へ送りて、入道の墓の側にぞ埋めける。（保元物語）

松村武雄
熊本縣の人、神話學者、文學博士、浦和高等學校教授、明治十六年（一八八三）生。
ウエストケンシントン
ロンドン西區テームス河の南にある地名。
クリサンセマム
「菊」の意、英語。
禁裡
胎生

一三　言葉の上の喜劇

松村武雄

一

「ウエストケンシントン」をウエストケンシントンと發音しては、英國人には通じない。「上杉謙信殿」といふ方がよりよく通用するとは、誰が言出したことか知らぬが、今日ではもはや一種の古典的な傳說となつてゐる。クリサンセマムは日本語である。「禁裡さんの紋」であると言出した洒落者もゐる世の中である。これくらゐの傳說の胎生は、決して異とするに當るまい。

たしか今某大學の講師をしてゐられるU氏であつたと記

憶するが、倫敦で或レストランに立寄つて、鮭に胡瓜をあしらつた料理を他人が食べてゐるのに食指頓に動き、鮭はサモン、胡瓜はキューカンバーと、型の如く發音したが、一向にそれが給仕に通じない。困り果てたが、氏の食慾は語學の上に超越して、頻りに口の中に唾液を分泌させる。聞き耳を立てて、懸命に客人の言ふことに氣をつけてゐると、どうも「サルモ・キユーカ」と響いて來る。「必要は發明の母」である。氏は遙々日本を離れて、倫敦の空で「サモン・キューカンバー」と辭書の教へてゐるところは、實は「猿も休暇。」であらねばならぬことを學び知つた。そこで早速「猿も休暇。」とやつてのけると、給仕はすぐ心得顔に、鮭と胡瓜との料理を運んで來たといふ。かうなると「上杉謙信殿」も決して馬鹿にしたものではない。それは單な

オックスフオード　イギリス、ロンドンの西北、テームス河の左岸にある都市、オックスフオード大學で名高い。

面喰ふ

る傳說以上の或るものであり得るといふ傍證を獲得したわけである。

二

オックスフオードに滯在してゐた時のことである。或日友達が、至極眞面目な顏をして、

「こちらの者は、話をしてゐるときに、よくポーン、ポーンと言ふぢやないか。一體あれはどういふ意味だい。」

と言出した。自分はすつかり面喰つてしまつた。自分は英國の土地を踏んで既に半歲になつてゐたが、不幸にして未だ嘗てその「ポーン」を耳にするの光榮を有しなかつたからである。しかし、自分と殆んど同じ環境のうちに生活してゐる友

這般のバードン
「御免なさい」の意、英語。

想到する
徒然草に
「栂尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふ男、『あしあし』といひければ、上人立ちどまりて、『あなたふとや、宿執開發の人かな。阿字阿字と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりに尊くおぼゆるは。』と、たづね給ひければ、『府生殿の御馬に候ふ。』と答へけり。『こはめでたきことかな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結緣をもしつるかな。』とて、感涙をのごはれけるとぞ。」（第百四十四段）

達が、麥酒の栓をぬくやうな這般の怪音を屢〻耳にするといふ以上、自分の耳にもこれを受入れつゝあるに違ひないと思つて、いろ〳〵考へた末、やつとそれが他人の言つたことを聽返すときに、英人の口からよく漏れる「バードン」であることに想到して、これあるかなと、覺えず手を拍つたことである。

徒然草に賤しい男が馬の脚を洗つてゐるとて「脚、脚」と言つてゐるのを、通りかゝつたお坊さんが、「阿字」と聽違へて、賤男の佛心に感涙を催した由書いてあるのは、誰でも知つてゐるところであらう。自分はこの條を讀むたびに、ジグムンド・フロイド博士などに話して聽かせたら、きつと精神分析學の好個の研究材料だと面を輝かすだらうと想像するのであるが、「バードン」を「ボーン」と聽誤つてゐる友達を、この新鋭な心理學の

ジグムンド・フロイド博士
オーストリア國の人、精神分析學の祖。（西暦一八五六―）

範疇

研究臺に上せたら、どんな心的錯綜の結果といふことになるだらう。斷つて置くが、この友達は決して麥酒の栓をぬく音に執著する程の酒呑ではない。

しかし、こんなことで友達の耳を笑ふ權利は自分には少しもない。嚴密な意味で同一の範疇に入れることの出來る言葉の上の喜劇を自分も體驗してゐる。巴里の或小劇場で、座席についてゐると、後の方で頻りに「ポカーン」「ポカーン」と叫ぶ聲がする。貧弱な自分の佛蘭西語の知識を以てしても、「ポカーン」は變である。驚き怪んで聲のする方をよく見ると、雪白の前掛をかけた女の賣子たちが、芝居の番組（プログラム）を呼賣りしてゐるのであつた。で、自分も座を起つて、謹んで一枚の「ポカーン」を買込んだことであつた。

フリードリッヒ大王　フレデリック大王、プロシアの賢王。（西暦一七一二―一七八六）

三

聞違へのほかに、意味の取違へがあつて、言葉の上の喜劇が一層多様になる。誰でも知つてゐる話ではあるが、フリードリッヒ大王は、近衛兵に新顔がはいると、きまつて第一に年齢を尋ね、次に入營してからの日數を問ひ、終に給金と待遇とに滿足してゐるかと聞くのであつた。と、或時少しも獨逸語を解せぬ一人の佛蘭西人が、近衛隊にはいることになつた。彼は大王の質問に應ずべく、お定まりの順序に應じて返答の出來るだけの言葉を暗誦して置いた。ところがどうしたのか、大王はいつもの慣例を破つて、眞先に、

「入營してから何日になる。」

しやちこばる

と尋ねた。新兵はこゝぞとばかり、

「二十一年です。」

と、しやちこばつて答へる。大王は驚いて、

「なに？　そしてお前はいくつだ。」

「一歳です。」

と、新兵は得意でゐる。大王はあきれ顔に、

「何だと？　こりや、朕かお前かが氣が違つたらしいぞ。」

と叫ぶと、新兵は澄まして、

「どちらも。」

と、やつてのけた。

四

「イフ」
「若し」の意、英語。

蜀山人
太田南畝、江戸時代の狂歌師、戯文家、文政六年（一八二三）歿、年七十五。

落語
仔細
粗忽者
不興がる
多謝す

東北出身の某代議士は、桑港に着いて、ホテルから電話をかける時、頻りに「イフ、イフ」と叫んで、對手を面喰はせたさうである。故國で電話をかける時の「もし、もし」の役を「イフ、イフ」に勤めさせようといふのである。しかし、この無鐵砲な直譯も、決してその仲間を有しないといふ譯ではない。そゝつかしい或男が、西洋人の足に水を注ぎかけて、「足輕怒る、お輕こはがる。」の蜀山人流・落語流に平あやまりにあやまつたはいゝが、それが却つて對手を一層怒らせてしまつた。仔細はその粗忽者が、「サンキュー」を連發したからである。なるほど、水をかけられた上に「有難う。」を繰返されては對手が不興がるも無理はない。しかし、「サンキュー」を「多謝す。」と覺え込んだ御當人は、心からおのれの粗忽を陳謝してゐるのであつた。

血眼になる

アインガング
「入口」の意、獨逸語。

作爲譚

五

ベルリンで古本探しに血眼になつてゐた頃、こんな話を聞かされた。どこかの官省から派遣された一人のお役人が、宿に落ちつくとすぐ散歩に出るとて、同伴の一人に、

「宿の名を忘れると大變だぞ。この旅館は……」

と、街路に出たところで、振仰ぐと、「アインガング」とある。

「さうか、ホテル・アインガングか。これで迷子になる心配はないぞ。」

と、得意さうな顏をした、と。

自分はこの話を信じなかつた。いづれかうしたことに興味を持つ或茶目の作爲譚に過ぎないだらうと思つてゐた。

ところが、幸か不幸か、巴里でこれと全く同じ言葉の上の喜劇が、實際自分の眼の前で展開したのであつた。餘り親しくはないが、日本人同志といふわけで、たまに市内散策を共にしてゐた某氏、地下鐵道の或停車場から出るなり、

「歸りにも、こゝから乘るから、停車場の名を覺えていかう。」

と、後をふり仰いで、

「あゝ、ソルテイといふのか。」

と呟いた。奚ぞ知らん、「ソルテイ」は「出口」に過ぎないのである。

（朗な斜視）

朗な斜視
松村武雄著、隨筆集、昭和六年（一九三一）二月刊行。

一三　現代短歌抄

尾上柴舟

桑の葉のやはらかなるに透きとほる日かげしみじみうれしき初夏

つけすてし野火の烟のあかあかと見えゆく頃ぞ山はかなしき

若山牧水

幾山河越えさりゆかばさびしさの果てなむ國ぞ今日も旅ゆく

ひそまりて久しく見れば遠山のひなたの冬木風さわぐらし

尾上柴舟
名は八郎、岡山縣津山市の人、歌人、國文學者、東京女子高等師範學校教授、文學博士、明治九年（一八七六）生。

若山牧水
名は繁、宮崎縣の人、歌人、昭和三年（一九二八）歿、年四十四。

窪田空穂
名は通治、長野縣の人、歌人、明治十年（一八七七）生。

長塚節
茨城縣の人、歌人、小説家、大正四年（一九一五）歿、年三十七。

齋藤茂吉
山形縣の人、醫學博士、歌人、明治十五年（一八八二）生。

錢湯に子を連來りちさき背を洗ひやりつつあはれとは見る　窪田空穂

人にわれものいひ疲れやめし時夜のしづかに蛙なくきこゆ　長塚節

芋の葉にこぼるる玉のこぼれこぼれ子芋は白く凝りつつあらむ

松の葉を吹きこむかぜの涼しきに咽びてわれはさめにけらしも　齋藤茂吉

死に近き母に添寢のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

中村憲吉
廣島縣の人、歌人、昭和九年（一九三四）歿、年四十六。

古泉千樫
名は幾太郎、千葉縣の人、歌人、昭和二年（一九二七）歿、年四十二。

のど赤き玄鳥ふたつ梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり　中村憲吉

篠懸樹かげ行く女らが眼蓋に血しほいろさし夏さりにけり

朝ゆふの息こそ見ゆれもの言ひて人にしたしき冬ちかづくも

山の町夕冷はやしをみな子のになひ行く水みちに垂りつつ　古泉千樫

さ青なる蕗の丸葉に尾を觸りて雉子しまらくうごかざりけり

川田順
東京市の人、歌人、明治十五年（一八四二）生。

日はひねもす照りつけらるる草山の夏深草は夜も乾けり（伊吹登山）

星のゐる夜空ふけたりわが船の大き帆柱の搖れの眞上に（熊野灘）

木下利玄
岡山縣の人、子爵木下利泰の養嗣子、歌人、大正十四年（一九二五）歿、年四十。

川田順

木下利玄

緣側に亡くなりし子の汚れものこの夕かげをしろくうかべり

棺の中の吾子の面わをおもひつつ人のうしろに立ちてゐにけり

吉田兼好
卜部兼好、山城國（京都府）の人、歌人、隨筆家、正平五年（一三五〇）寂、年六十八。徒然草二卷、吉田兼好の隨筆。栗栖野山城國（京都府）、今京都市東山區栗栖野。寛

つゆ

一四 徒然草抄

吉田兼好

一 神無月の頃

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りしに、遙なる苔の細道を踏分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋るゝ筧の雫ならでは、つゆおとなふものなし。閼伽棚に菊・紅葉など折散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、彼方の庭に、大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、廻りを嚴しく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覺えしか。

（第十一段）

仁和寺 山城國（京都府）京都市左京區花園町御室にある、眞言宗御室派の大本山。
石清水 山城國（京都府）綴喜郡石清水八幡宮の事、男山八幡宮。
かちより
極樂寺 男山の麓にある寺。
高良 男山の麓にある社。
ゆかしかり

二　仁和寺にある法師

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ、心うく覺えて、或時思ひ立ちて、唯一人かちより詣でけり。極樂寺・高良など拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの人に會ひて、「年頃思ひつる事果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて貴くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へ參るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。少しの事にても先達は有らまほしき事なり。

（第五十二段）

三　鼎法師

是も仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、各遊

かづく
かなづ
大方……ず
腫れに腫る
くすしのがり
ゐて行く

ぶ事ありけるに、醉ひて興に入る餘り、かたはらなる足鼎を取りて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻を押平めて顏を差入れて舞出でたるに、滿座興に入る事限なし。暫しかなでて後、拔かんとするに大方拔かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、頸の廻り缺けて、血垂り、只腫れに腫滿ちて、息もつまりければ、打割らんとすれども、たやすく割れず。響きて堪へ難かりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷衣を打懸けて、手を引き杖をつかせて、京なるくすしのがりゐて行き

鼎法師

さこそ
ことやうなり
くゞもり聲

枕上

しべ

缺けうぐ
からき命

けるに、道すがら人の怪しみ見る事限なし。くすしの許にさし入りて對ひ居たりけん有樣、さこそことやうなりけめ。物を言ふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝる事は書にも見えず、傳へたる教もなし。」と言へば、また仁和寺へ歸りて、親しき者、老いたる母など、枕上に寄居て泣悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝる程に、或者の言ふやう、「たとひ耳鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立てて引給へ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、頸もちぎるゝばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら拔けにけり。からき命まうけて、久しく病居たりけり。

（第五十三段）

四 弓射る事を習ふに

もろ矢

等閑

期す

或人弓射る事を習ふに、もろ矢をた挾みて的に向かふ。師の曰く、「初心の人、二つの矢を持つこと勿れ。後の矢を賴みて、初の矢に等閑の心あり。毎度只得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」といふ。僅かに二つの矢、師の前にて一つを疎にせむと思はむや。懈怠の心、自ら知らずと雖も、師これを知る。この戒、萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらむ事を思ひ、朝には夕あらむ事を思ひて、重ねて懇に修せむ事を期す。況や一刹那のうちに於て、懈怠の心ある

弓射る事

おきて（おきつ）

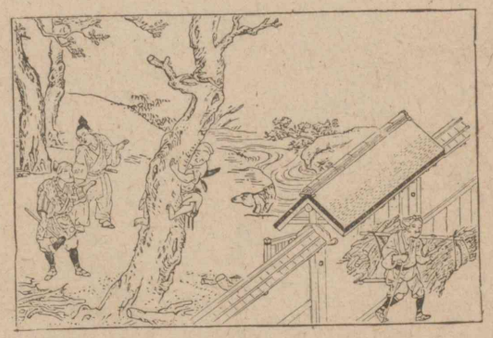
心す

その事に候くるめく

事を知らむや。何ぞ只今の一念に於て直ちにする事の甚だ難き。

（第九十二段）

五 高名の木登り



高名の木登り

高名の木登りといひし男、人をおきて高き木に登せて梢を切らせしに、いと危く見えし程はいふこともなくて、下るゝときに軒長ばかりになりて、「過すな、心して下りよ。」と、言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛下るとも下りなん。いかにかくいふぞ。」と、申し侍りしかば、「その事に候。目くるめき、枝危き程は、おのれが恐れ侍れば申さず。過は安き處になりて必ず仕る事に候。」といふ。あやしき下臈なれども、聖人の戒にかなへり。鞠も、難き所を蹴出して後易く思へば、必ず落つと侍るやらん。

（第百九段）

あやしき下臈

聖人の戒

君子安ケレド危キヲ忘レズ、治ニキテ亂ヲ忘レズ。（易經―繫辭傳）

六 相模守時頼の母

相模守時頼の母は松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝ事ありけるに、煤けたる明障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀して切廻しつゝ張られければ、せうとの城介義景、其の日のけいめいして候ひけるが、「賜はりてなにがし男に張らせ候はん。さやうの事に心得たる者に候」と、申されければ、「其の男、尼が細工によもまさり侍らじ。」とて、なほ一間づつはられけるを、義景、「みなを張りかへ候はんは、遙にた易く候べし。

時頼

北條時頼、鎌倉幕府の執權、弘長三年（九三）卒、年三十七。

松下禪尼

秋田城介安達景盛の女、北條時氏の室、生歿年未詳。

守

相模守時頼をさす。

入れ申す

せうと

城介義景

秋田城介安達義景、秋田城介は出羽國（秋田縣）秋田城を管理する役。

けいめいす

さわ〳〵と

儉—檢—險—驗

聖人の心

子曰ク、約ヲ以テ之ヲ失フ者ハスクナシ。（論語—里仁篇）

天下を保つ

まだらに候も見苦しく候」と、重ねて申されければ「尼も後はさわさわと張りかへんと思へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ふる事ぞと、若き人に見ならはせて心づけん爲なり。」と、申されける、いとありがたかりけり。世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下を保つほどの人を子に持たれける、まことにたゞ人にはあらざりけるとぞ。

（第百八十四段）

三浦梅園

名は晋、豐後國（大分縣）の人、儒者、寛政元年（一七八九）歿、年六十七。

勺

辨

或人云々

劉安世、光ニ一言以テ終身之ヲ行フベキモノヲ問フ、光曰ク、ソレ誠カト、安世其ノ從ヒ入ル所ヲ問フ、曰ク、妄語セザルヨリ入ルト。（宋鑑）

司馬溫公

名は光、支那宋代の政治家、學者、西暦一〇八六年卒、年六十八。

一五 誠の說

三浦梅園

一勺の水を海に入れて、海の水增したりといはむは愚なり。增さずといふは妄なり。水を加ふる所は我にして、增すと增さざるとは我にあらず。我にあらざるものは強ひて其の辨を求めずして可なり。我にある所の誠を盡くす、これ君子の道なり。誠とは嘘を言はざる事とのみ心得たらむは愚なる事なり。或人、司馬溫公に誠に入る道を問ひければ「妄語せざるより入る。」とぞ答へける。げに妄に語らず、嘘を言はぬより、誠の道には入るなれども、嘘を言はぬばかりを誠とは言はぬなり。僞を言はぬに對する信は小さし。僞なきに對する誠は大なり。罌粟の子、煙草の實は至つて小さき物なり。地に

昧ます

瘁く

衛の靈公
名は元、支那春秋時代に於ける衛の君、西暦前四九三年歿。

闕下

落せば目にもかゝらぬやうなれども、内に一つの誠といふものあつて、奪ふべからず、隱すべからず、昧ますべからず、覆ふべからず。其の時到るに及んでは、芽を出し、葉を生じ、花を開き、實を結ぶ。其の子を水に腐らし火に燒きて芽を出さずといふは、その子の咎ならむや。是によりて物の子を實といふ。實は卽ち誠なり。少しにても誠ならざるものありて、腐りたるものは芽生ぜず、痛みたるは瘁く。人の誠も猶此の如し。

昔、衛の靈公といひし君、夜、夫人と共に坐し給ひけるに、遙に車の轟く聲しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過ぎて又鳴りけり。靈公「誰なるべきや。」と、夫人に問ひ給ひければ、「是は蘧伯玉なるべし。禮に『公門ニ下リ路馬ニ式ス。』といふことあり。『忠臣ト孝子トハ、昭々ノ爲ニ節ヲ信ベズ、冥々ノ爲ニ行ヲ惰ラズ。』といへり。蘧伯玉は衛の賢人なり。夜なればとて禮を廢てじ。」といひけり。靈公、人を遣はして見しめけるに、果して伯玉にてぞありける。

蘧伯玉
名は瑗、衛の賢大夫。

禮
周末から秦・漢時代の諸儒者の古禮に關する說、後に禮記としてまとめられたもの、禮記は四十九篇、五經の一、支那古代の禮書、漢初になる。（西暦前一〇〇年乃至前五〇年頃）

四知
後漢（支那）の楊震が王密に言つた言葉、「天知ル、神知ル、我知ル、子（王密を指す）知ル。」

人知るまじとて欺くは妄なり。四知といひて、人知らずと思ひても、天知る、地知る、神知る、我知る、いかでか掩ひかくすべき。たとへば、一升の米、日々に二三十粒を取らむとも、置かむとも、知れざるべし。然れども、久しく置く時は增し、取る時は減る。草木も、朝見し色も、暮に見し色も、昨日見しも、今日見しも、さして變らぬやうなれども、誠といふもの少しの間斷なき故に、いつ太るともなけれども、次第に太るものなり。人の見ぬ間とて間斷あらば、草木も思ふまゝには伸びもすまじ。深き谷の蘭も遙なる山の紅葉も、人なしとてもよく薰り、美しく

筈にあふ

誠の俄掃除

其の肺肝を見るが如し

人ノ己ヲ見ルコト其ノ肺肝ヲ見ルガ如ク然リ。（大學）

僞も

後撰和歌集所收、讀人知らず。

梅園叢書

三卷、三浦梅園著、人情・世態に關する感想集、安政二年（一八五五）刊行。

照ればこそ、人到りたる時も香清く色麗しけれ。人の到るを待ちて香を放ち、色を出さむとせば、筈にあふことあるべからず。常々心に掛けて掃灑したらん座席と、俄に蜘蛛の絲取り、柱拭きたらむとは、いかでか見紛ふべき。人、平生をたしなまずして、その期に臨み僞り交らむは、誠の俄掃除なるべし。「其ノ肺肝ヲ見ルガ如シ。」とて、人欺くべからず、我が心を欺くなり。

僞も人に言ひてはやみなまし心の問はばいかがこたへむ

この歌の如く、人をば欺くべけれども、心に心を顧みて、いかに今の如く誠ならざることをばいひしぞ、人をば欺くに、などて自らの心を自らは欺ける、と咎めたらむには、自ら恥づかしくなり、ひとり居ても額より汗出づべし。

（梅園叢書）

森鷗外

名は祿太郎、島根縣の人、醫學博士、文學博士、陸軍軍醫總監、帝室博物館總長、宮內省圖書頭、大正十一年（一九二二）歿、年六十一。

分疏

一六 天寵

森鷗外

M君は「去年お話をしたかも知れませんが。」と言つて、其の經歷談の口を切つた。話の概略はかうである。

M君が去年ひど算段をして畫をかいて、某展覽會に出した時、君の父親は故郷で大病になつてゐた。入選したといふ吉報を、父に息のあるうちに聞かせたいのが、君の切な願であつた。これは單に父を喜ばせたいといふだけではなかつた。畫かきになるのを、世の廢れものになるやうに思つて、强ひて思ひ止らせようとした父に、君は自分の成功を知らせて、自分が空虛な希望を懷いてゐたのではなかつたといふ分疏をしようとしたのであつた。

千駄木町
東京市本郷區駒込千駄木町。

父は亡くなつた。故郷で家を繼いだ兄は、纔に一家の生計を營んでゐるだけで、M君に學資を出してやることは出來ない。M君は今までのやうに籍を學校に置いてゐるには、自力で生活費と學資とを得なくてはならぬことになつた。

M君はTといふ文房具屋へ往つて、小僧になりたいと申込んだ。學資を拂つて貰つて、午前は學校に往き、午後は小僧として働かうといふのである。Tは主に洋畫の顏料や、畫布や、畫筆を商ふ人で、私の住んでゐる千駄木町の北、千駄木林町に工場を持つてゐる。商人に珍しいTは、この我が儘な小僧らしくないM君の注文を聽納れて、君の學資を出し、君を三疊の部屋に置いて、午前は學校に通はせた。

M君は暫く小僧生活を經驗した。そして、その間に豫想し

デッサン
「素描」の意、フランス語。

なかつた故障を見出した。それは午後に小僧になつて勞働する自己と、午前に畫かきになつて修行する自己とを、かつきりと分割することが出來ぬといふ事實である。學校でデッサンをするのに、どうも今までのやうな氣分になれない。昨日の小僧が出て來て、今日の畫かきの邪魔をする。

そこでM君はいろ〳〵に考へて見た末に、主人Tにかういふ相談をした。自分は一旦誓つた事を必ず履行しようと思つたが、どうもそれが出來なくなつた。前日の小僧生活が翌日の畫の邪魔になる。然るに、畫は廢めることが出來ぬから、小僧を廢めるより外ない。さて小僧を廢めて、どうして學資と生活費とを得ようかといふに、自分の考へた所では、只一つの方法しか無い。それはこのまゝこちらに置いて貰つて、こ

ちらの商品を學校の先生や生徒仲間に賣捌くのである。毎日學校に往つて稽古をして、かたはら顏料やなんぞの注文を聞く。そして、注文せられた品々を、次の日に學校へ持つて往く。それが、今まで小僧をしたと同じ程、こちらの役に立つかどうか知らぬが、とにかくそれだけの仕事をする報酬として、今まで通りこちらで世話になりたいといふのである。

M君はTが腹を立てはせぬかと氣遣ひつゝ此の話をした。然るに、意外にもTの顏には、大人が子供の話を聞く時の微笑のやうな微笑が現れた。そして、Tは言つた。「さうですか。私も一旦あなたの身の上を引受けたものですから、お望通りにして上げませう。これまでも、あなたの方では小僧として一廉の骨折をしてゐた積りでせうが、實は內の坊主ほどの

腹を隱す

役にも立つてはゐません。それですから、商品の賣捌はうまく行つても行かなくても、私の方の損得には格別これまでと違つた事も無いのです。若し又うまく賣捌が出來たら、收入の五分位はあなたに上げるから、あなたの方にも得が行くわけです。」と言つた。內の坊主と言ふのは、去年九歲であつたTの息子である。

Tはこの時又かう言つた。「あなたの正直な事は、私が一目見て見拔いた積りで、內へ入れたのです。それは私の見込違ではなかつた。併し、私は別に見込違をした。それはあなたは畫の方がうまく行かないので、文房具商にならうと思つて這入り込んだのだ。人は正直だが、その腹だけは隱してゐて、こつちの樣子がわかつた上で、私に腹を打明けようといふの

だらうと、かう思つたのです。所が、今になつて見れば、あなたは飽くまで畫かきにならうとしてゐなさるやうだ。私は遠慮無しに言ふから、おこつてはいけませんよ。一體あなたは畫で成功するといふ見込が立つてゐるのですか。先生方はなんと言つてゐますか。」と言つた。

M君は有のまゝに、先生方の意見は改めて聞いて見たこともないが、自分だけは成功する積りだと答へた。

Tはこの答に滿足しないで、かう言つた。「自分でばかりさう極めてゐたつていけません。第一あなたが苦しい思をして、無駄骨を折つてはならない。それに私だつて世話をして上げるからには、世話甲斐が無くてはつまらない。どなたにでも好いから、不斷あなたの仕事を見てゐる先生に、末の見込がありさうだか聞いて御覽なさい。」と言つた。M君は、「さういふわけなら、近いうちにW先生に聞いてみませう。」と約束した。

そして、小僧といふ旁業から、行商人といふ旁業に轉じた。

M君は、學校で先生や生徒仲間の注文を聞いて、翌日その品を持つて行く事になつた。暫くたつてM君は行商人が決して小僧より樂でないことを知つた。片手に自分の學校道具を持つて、片手に注文の品を持つのだが、その品が時々嵩張ることがある。顏料や畫筆なら幾ら持つても知れたものだが、畫布は枠に張つて來て貰ひたいと言ふ人があるので、その張つたのを二枚持つて行く日には、寒い日にも汗を出して、途中で何遍も休まなくてはならない。その上T方で品物を取揃へたり、枠張をしたりすると、折角廢めた小僧生活が幾分か再

旁業

現することになる。新しい旁業から生ずる、この室内、途上の勞働は、殆ど初の小僧生活と同じ程の惡影響を、學校にゐる時の氣分に及すのである。それと同時にM君は内部から一種の壓迫を受けて來た。それは強烈な制作欲が發して、次第に高まつて來たのである。學校でしてゐるデッサンは、見廻りに來た先生に「さう、君、奇拔にばかりやらうと思つてはいかん。」といはれるが、君自身は殆ど機械的にしてゐる積りである。これではすこしも制作欲を滿足せしめることは出來ない。そこで、内に歸つてゐる間に畫がかきたい。頭が一ぱいになつてゐるのを外へ出したい。然るに、行商人としての日々の仕事に時間を取られる。また、Tの貸してくれた三疊の間には、夜具や机を持ちこんでゐるので、畫をかく場所も無い。そ

カリカチュール
「諷刺畫、漫畫」の意、フランス語。

れから、Tには學資を出して食はせて貰つてゐるだけで、現金といふものは行商の賣上金から五分の配當を受けるより外には無く、それも一箇月に精々二圓位のものなので、畫布や顔料を買ふことが出來ない。

こんな風にM君は外からは行商生活に苦しめられ、内からは制作欲に惱まされてゐるので、Tには約束して置きながら、久しくW先生を訪問することが出來なかつた。W先生は自分のカリカチュールを山賊のやうにかく、こはい顔の人であるが、生徒に優しくしてくれるので、君は自己を鑑識して貰ふことをこの人に賴まうとしたのである。そのうちTが、「どうです、先生の所へ往つて見ましたか。」と催促することが二三度に及んだ。君もこの上捨てても置かれなくなつて、或日ふら

麻布　東京市麻布區。
アトリエ　「畫室、仕事場」の意、フランス語。
パレット　「調色板」の意、フランス語。
しどろもどろ

ふらとT方を出て、麻布霞町のW先生のアトリエに往つた。

M君がこの家の閾を跨ぐのは二度目であつた。戸を開けて這入つて見ると、先生は畫架の前に立つて畫をかいてゐた。M君を一目見て、「一寸待つてくれ給へよ。」と言つて、そのまゝかいてゐる。君は暫く傍で見てゐる。こんなにして畫をかくことが出來たら、どんなに愉快だらうと思ふと、君の胸は跳る。

W先生は筆を停めた。そして、筆とパレットとを無造作に置いて、身を椅子の上に投げた。「さあ、君も掛け給へ。待たせて濟みませんでした。何か用事ですか。この頃はどうしてゐます。」「實は先生に伺ひたい事がありまして。伺つたところで、どうにもならないのですが。實は。」M君の詞はしどろもどろであつた。この時W先生の顏には微笑が浮かんで、そ

の口からは、物馴れた醫者が病人の容體を問ふ時のやうな、いたはりつゝ、探り究める種々の問が發せられた。君はそれに答へてゐるうちに、心に思つてゐるだけの事を殘らず打明けてしまつた。

W先生は聞いてしまつて、かう言つた。「そんなら先づ君の用事から片附けて行くとしようね。Tには、かう言つてやり給へ。Wの言ふには、私の前途は決して平坦な道ではないが、躓かずに進んだら、面白い境界に達するだらうといふことだとね。それは好いが、君の現狀には困つたね。それを脫するには金がいる。さあ、私にも格別の名案は無いね。これは今君の話を聞いてゐるうちに、ふと思ひ出したのだが、ヨーロッパの畫かきの所へは、よく商人が顏料や畫筆を澤山持つて往

つて預けて置く。それを畫かきは入用な時幾らでも使ふ。商人は時々往つて、どれだけ使つたかを見て勘定をする。あれをTに相談してやつて見てはどうだらう。私にも差當りそれ位の智慧しか出ないね。それから、私が君に補助をしてあげても好いが、大した事は出來ない。毎月五圓出してあげよう。併し、只貰ふのは不愉快だらうから、君に賴むことがある。私の所へ或植木屋から、期日をきめて薔薇を送ることになつてゐる。君はその植木屋に話して、それを私の所へ運搬することにしてくれ給へ。たまの事だから、勞力も時間の損失も格別無い筈だ。さうして貰へば、私はその報酬として、君に五圓あげるからね。」

M君はこの話を聞いて、素直に承諾した。そしてW先生に

はける

簡單な禮を言つてアトリエを出た。戸の外に出ると、M君は深い息をして、心の内で「畫がかける。」と叫んだ。電車の中では、早く畫室になる樣な明二階か何かを捜して見たくてならなかつた。T方に歸つて、M君は主人に先づW先生の豫言を言つて聞かせた。「はあ、なか〳〵あなたを買つてゐますね。」と言つたTの顏には、君の目で見ると、どうも反對の、全く消極的な宣告を受けて來るものと豫期してゐたらしい表情が見えた。それから畫かきの所に材料を預けて置かうといふ相談をした。主人は「さうですな。」と言つて、煙草をのみつゝ考へてゐたが、煙草の吸殼をはたいて、「どうもそいつはいけませんな。」と言放つた。商品をどれだけ買込んで置く。その内どれだけはけて行く。そのはけて行くだけを買足す。かうして均衡を

免疫性
不仁身

失はぬ樣にと骨を折つてゐるのに、所々方々に商品を置放しにして、謂はば寢かして置く譯にはいかない。西洋ではそんな事が出來るか知らぬが、日本ではそれの出來る商人はあるまいと言ふのであつた。M君は主人の話を聞いて、別段落膽もしなかつた。それは心の内に、「畫がかける。」「畫だけはかける。」といふ叫が、絶間無く響いてゐて、自分の内生活が今までゐた灰色の霧の中から、薔薇色の霞の中へ移されたやうな感じがしてゐるからである。よし今まで通りの行商をして行かなくてはならぬとしても、君は今ならその煩勞に堪へることが出來ようと思ふ。「畫がかける。」といふ叫は、君にあらゆる苦艱に對する免疫性を與へる。君を不仁身にする。

次の日、學校から歸るとすぐに、M君は貸間を捜しに出た。

天を補ふ五色の石
女媧五色ノ石ヲ鍊リ以テ蒼天ヲ補フ。（淮南子）

十軒ばかりも見たあげくに、或裏町で、とう〳〵明かりの工合の好い二階を、一箇月三圓で借ることが出來た。そこへ道具を持運んで、大抵の物はT方の廢物を代用して濟ますやうに工夫して、間に合はせのアトリエを完成するのが、M君の爲には、殆ど畫をかくと同じやうな悦であつた。たゞ畫がかけさへすればよいといふ原則の下に、君は總べて金のかゝる設備を省かうとした。M君はまだ設備の出來上らぬうちに植木屋に往つた。植木屋では、丁度薔薇を送る期日になつてゐるといふので、溫室で咲かせた薔薇を一籠わたした。それを持つて往つて、W先生から五圓の金を受取つた。その中から一箇月分の間代を差引いた二圓は、君の畫室の爲には、天を補ふ五色の石程の用にたつた。

モデル　フランス語。

畫室の設備が出來上つた所で、M君はモデルを傭ふ金に窮した。君はどうしても人物がかきたい。それにはモデルが無くてはならぬのである。M君の持つてゐる物の中で最も價の貴いのは、去年某展覽會に出して落選した、大きい油畫の額縁である。君はTに頼んで、それを二十圓に買つて貰つて、モデルを傭ふ資金にした。君の爲には、これが最後の手段で、この二十圓を使つてしまふと、君は再び去年の畫が落選した後の樣な、かきたい畫のかかれぬ境遇に戻るのである。かくしてM君は、毎日日沒前の二時間を畫室で暮すことになつた。

この話をしてしまつて、M君は二枚の油畫を私に見せた。二枚とも去年のやうな模糊たる人物では無い。「なぜこんな風なのを去年出さなかつたのです」と、私は尋ねた。

鷗外全集第三卷　明治四十三年以後の小説二十四篇を集む、昭和十二年（一九三七）三月刊行。

「でも、あの時一番かきたかつたものをかいたのだから、仕方がありません。」と、君は答へた。

それから、私はM君にこんな事を言つた。「君の近業を見せて貰つたのは有難い。併し、君の經驗談を聞かせて貰つたのも、それに劣らぬ有難いことである。君は自分の境遇をひどく不幸だと思つてゐるか知らぬが、一轉して考へて見れば、君のやうな運命の寵兒は珍しい。君はTのやうな商人が、今の世の中に又あらうと思つてゐるか。又W先生のやうな師匠が又あらうと思つてゐるか。君はどう思ふ。」と私は言つた。

M君は自分の境遇が意外な照明を受けたのに驚いたらしく、「なる程、さうでせうかね。」と言つて目をみはつた。

（鷗外全集第三卷）

口繪參照

吉田絃二郎
名は源次郎、佐賀縣の人、小說家、劇作家、明治十九年（一八八六）生。

玉川
多摩川、山梨縣北東部山地に源を發し、武藏野盆地の南に沿うて流れ、東京灣に注ぐ川、下流を六郷川といふ。

醉狂な

一七　梅

吉田絃二郎

久し振りの快晴。昨日の霙の雲のなごりも見えない。私は朝早く家を出て玉川のほとりを歩いた。日曜ではあるし郊外の人出もさこそと覺悟をして出かけて見たが、さて玉川の川原にたどりついて見ると、冬の風のみ白く人の影もない。なるほど年の瀨であつた。あわたゞしい年の瀨をわざ〳〵秩父颪に吹かれに玉川まで出かけてゆく醉狂な人もないのであらうなどと、自分の考の足りなかつたことを笑ひたいやうな氣になつて歩いて行つた。

富士は眞つ白である。いつ見ても尊い山である。箱根あたりの山であらうか、青く煙のごとく南の空を流れてゐる。

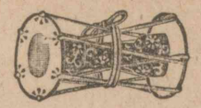
久地
川崎・立川及尻手・新濱・川崎間電車（南武鐵道線）久地梅林驛附近。

秩父は墨の如く黑い。私は、川原に面した丘の雜木林の中にしやがんで、心ゆくまで靜かな山と川とをながめた。ふと、私がしやがんでゐる草の中から五六歩はなれたところに、一株の梅の老木が、雜木の中にまじり雜木の梢に壓されてゐるのを見た。しかも枝頭すでに可憐な蕾を懷いてゐる。私はむしろ淡い驚を感じた。

玉川の彼岸の久地の梅林に梅を觀に行つたのは二三年前の紀元節の日であつた。玉川あたりの梅の見頃は紀元節から始つて三月にわたつてゐる。それだのに藪の中の老梅は來ん春を待ちつゝすでに虔しやかに春の支度をしてゐる。

これから花の開くまでには、幾度か霙にも、雪にも、冷たい風にも打たれることであらう。そんなことを考へてゐると、た

鼓



枯淡な

だ一輪の梅の花に對しても頭が下るやうな氣がする。

私達は所詮東洋人である。自分等の血のなかに流れてゐる東洋人的な趣味なり、嗜好なり、感慨などといふものが、一年一年と年をとるにつれて、明かるい、幅の廣い西洋風なものから、やゝ暗い深さを愛する東洋風なものへ還つてゆくのをしみじみと感じさせられる。鼓の音、竹笛、さういつた日本の樂器のきはめて單純な音のなかに、掬まんとして掬みつくせない味を見出すやうになつて來る。

東洋の藝術、殊に日本の足利時代このかたの藝術、或は藝事の最もすぐれた點は簡素といふことにある。聖なりと感ずるほどに枯淡なことにある。靜勁なことにある。弱きがごとくして底に力强き靜かな深いところのものを持つてゐる

纏綿と

退嬰的な

ことにある。

梅

笛のたゞ一聲の裡に私達は纏綿として盡きざる餘韻を感ずる。やるせなき餘情を感ずる。靜かなるものの强さを感ずる。無限なる深さを感ずる。

私達は梅を愛することを敎へられて育つて來た。一頃は、梅を愛するといふやうな趣味を退嬰的なこととしてけなしたく思つた時代もあつた。しかし、今日では自分からすゝんで梅を愛するやうになり、菊を

暗香
疎影横斜ス水清淺、暗香浮動ス月黄昏。（林和靖「山園小梅詩」）

利休
千宗易、利休はその號、堺の人、茶道千家流の祖、天正十九年（一五九一）歿、年七十一。

思惟
空に息する
虚に合一する
苦茗

愛するやうになつた。誰が暗香といふ言葉を使ひはじめたのか知らないが、いゝ言葉である。東洋藝術の特長はたしかに梅のかすかな虔しやかな香のごとく、あるがごとく、なきがごとく、靜かにして幽に、その掬みつくせぬ味の深さにある。

珈琲よりも、紅茶よりも、日本茶のうまさを知る。淡々たる日本茶のうまさは、日本の藝術或は藝事のうまさである。味である。

味を知る。嚙分けるといふことが眞の智慧である。利休がいつたやうに茶道の奥義は「茶を立てて飲むことなり。」にちがひない。茶の味を知ることである。眼をつむつて茶の澁味を愛することである。靜居して、雜念を去り、思惟を一念に凝らして、空に息し、虚に合一して、一碗の苦茗を喫することに

ある。いひ換へれば、親切な、こまやかな心で、一碗のお茶をいたゞいて飲むことにある。

高い山から山を歩いてゐる人達はいつも經驗することであるが、たま〳〵深々として岩間からわき出でる眞清水を掬む刹那に、はじめて水のうまさを感ずる。ありがたさを感ずる。リュクサックに結びつけたアルミニウムの小さな水飲の中のわづかな眞清水には、深山そのものの幽邃さも嚴かさもこめられてゐる。たゞ一碗の水とはいひながら、そのなかには天をもつゝみ地をもこめてゐる。

一碗の水・一碗の茶の、ありがたさ・尊さを味はひ感ずるだけのこまやかな親切な心が茶の心であらう。私はそのやうに考へてゐる。

樸々たる

草のなかにしやがみながら、私は雜木にいためられてゐる老梅を見た。小さな蕾を見た。黑い樸々たる梅の梢を見た。昔から東洋の畫人達がこの枯淡な梅を取りあつかつた心持を想像すると、いかにも尊いものがある。私達の胸にぴつたり來るものがある。

雜木林の片隅に顧みられることもない老梅は、十二月の寒空の下に春を待つてゐる。すべての生けるものは、涙ぐましいほどの根强さと靜けさとを持つて、生きることの努力を盡くしてゐる。

十二月の太陽は靜かに老梅の蕾をあたゝめてゐる。あたかも可憐な蕾をいたはるかのやうに。

生きることの寂しさ、生きることの尊さ。

吉田絃二郎全集十八卷、昭和九年（一九三五）五月—昭和十一年三月刊行、本課は第二感想集の山家日記より採る。

すべてのものは靜かに忍びつゝ生きてゐる。

がさ〳〵と草を踏む人の跫音が聞えた。私から半町ばかり離れた草のなかに、一人の男が私と同じやうにぽつねんと川原をながめてゐるのであつた。

私は川原の方へ歩いて行つた。そこでもまた一人の男がぽつねんと冬の山をながめつゝ歩いてゐるのを見た。

山がある限り、人間が生きてゐる限り、世界のいたる處で、誰かがいつでも、山を思ひ、人生を思ひつゝ歩いてゐる。

（吉田絃二郎全集第十二卷）

島木赤彦
本名久保田俊彦、長野縣の人、歌人、大正十五年（一九二六）歿、年五十一。

萬葉集時代
仁德天皇の元年（一三三）より淳仁天皇天平寶字三年（一四一九）まで凡そ四百四十年間。

弛緩

民衆心理

一八民謠

島木赤彦

日本民族には、太古から日常の感情を歌謠にうつして、自ら口に歌ひ、且又、對者と唱和するといふ風があつた。それ等の民謠の中で、或特別な形式を備へたものは、移つて短歌となつて、かの萬葉集時代に於ける大發達をなした。然るに、この萬葉集時代に緊張の頂點まで達した短歌が、古今集以後の勅撰集に至つて著しく弛緩の情態を現したといふことは、一面奇異な現象のやうに考へられるが、それは決して奇異ではないのである。

古今集以後の短歌といふものは、萬葉集の歌の如く、傳統的に民衆心理から生み出された歌ではない。民衆とかけ離れ

空疎

萎縮

勅撰集時代
古今集撰進より、新續古今集の撰進せられた後花園天皇の永享十一年（一四三九）までの約五百三十餘年間をさす。

神樂歌
神樂に合はせて歌ふ歌。

催馬樂歌
奈良朝時代の民謠で馬をひく時に歌つたものを平安朝時代に至つて雅樂の中に入れ歌曲としたもの。

利根川
關東平野を流れる大河。

た一部貴族社會の玩弄物であつて、その出來方も、緊張した感情から生み出されると言ふよりも、外形を整へるに苦心して作り出されたもので、內面の空疎と萎縮とは當時の歌人の思はぬところであつた。故に私は、萬葉集の精神は決して勅撰集には傳はらずに、かへつて短歌の形を存してゐないその當時の民謠に存してゐると信じてゐる。民衆の心理から生まれた短歌の精神が、民族的歌謠の一分流であるところの民謠に合流してゐることは、決して不自然ではない。

このことは、勅撰集時代のその背後に存してゐたと思はれる、神樂歌や催馬樂歌の中に現れてゐる民謠を檢べて見れば、容易にうなづくことが出來るのである。

笹分けば袖こそ破れ、利根川の石は踏むとも、いざ河

しながどり
猪名の湊
攝津國（兵庫縣）川邊郡長洲。

足利時代
室町幕府の初より足利氏の滅亡まで約百八十年間。

德川時代
關ヶ原の戰より明治維新まで約二百七十年間。

惻々と

原より。

しながどり猪名の湊に入る舟のかぢよくまかせ、舟か
たぶくな、若草の妹も乘せたり、我も乘りたり。

といふやうなのはほんの一例に過ぎぬが、この民謠から採つたと思はれる神樂歌や催馬樂歌を以て、古今集以下の勅撰集に比べても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白である。さうして、この民謠の系統は、足利・德川の各時代を經て、順次に發達推移して、今日に及んでゐるのである。

然らば、それ等の民謠の生命となつてゐるのは何であらうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に生み出したところの、惻々として人の心を動かす力を持つ情調である。農民の唄ふ歌謠には、のん氣に似て、その底には重々しい調子が

漂泊
やるせない

にや
北國街道
北陸街道と中仙道とを連絡する街道、信濃國（長野縣）迫分で中仙道に分かれ小諸・長野を過ぎて高田・直江津に至る。

こもつてゐるし、船頭唄や馬子唄には、多くは漂泊のやるせない哀音がこもつてゐる。

乳が崎沖まで見送りましよが、それから先は神だのみ。

伊豆大島のこの唄の如き、必ずしも船唄とばかりは言へぬが、海中の孤島に賴りなく住む人々の心理が「神だのみ」の哀音となつて現れてゐる純粹さは味はふべきである。

淺間の煙が北へと靡く、今宵泊らにや雨になる。

一誦して、淺間の山裾から碓氷越をして、北國街道を往來する馬子の唄であることがわかるではないか。淺間の裾野には追分の宿場があり、碓氷峠の下には坂本の宿驛があつて、いづれも中仙道の旅人の一夜の泊場であつた。そこの宿引の女が旅人を呼びとめて、一宿を勸める心がこの歌の心である。

中仙道
江戸時代の五街道の一、京都から東山道を經て江戸に通じる街道。

一夜の宿を勸める歌謡を、勸められる旅人や馬子が自ら唄つて、自分の境遇を辛うじて慰めてゐるところが、哀な漂泊の心である。年が年中、馬の鈴を鳴らして、上るは碓氷の坂、下るは輕井澤・追分の曠野である。見上げる空には、いつも淺間の煙が靡いてゐる。煙は高く南へ靡く。風が北になれば日は晴れる。煙が北へ靡けば、あすの日和は雨となる。「今宵泊らにや雨になる」は、この嶮坂を上下する脚絆・草鞋の身には、決して戯れの問題ではないのである。

宿驛（廣重筆）

掌中の玉
人麿
柿本人麿、萬葉集の歌人、持統・文武の兩天皇の朝に仕へた。

貫之
紀氏、平安朝時代の歌人、文章家、古今集の撰者の一人、天慶九年（九四六）歿、年六十五。

抒―敍―述

地方的の個性

麥ついて、夜麥ついて、お手にまめが九つ、九つのまめを
見れば、親里がこひしや。

麥をつくのは農家の新婦である。嫁していくばくならず、家人の心も知り難く、起臥にいとゞ落著かぬ心がある。父母の愛娘として掌中の玉であつた優しい身も、今は夜麥をついて掌に出來たまめを眺めて、親里を思ふ痛切さは、恐らく人麿・貫之の秀歌にも優るものがあらう。

これ等の唄は、その生活から唄はれてゐる。その職業や境遇の生む情調が抒べられてゐる。さうして、民謡としての生命も、全くその中にあるのである。

かゝる職業的個性の心理や感情を表す民謡ほど、それがまた地方的の個性を表現してゐると言得る場合が多いやうで

宿驛

甲斐 山梨縣。

ある。土を離れて人なく、人の個性は少くも土の個性を離れる事は出來ない。その土地の持つ情調が、その土に住む生活から唄はれた民謡に強い影を投ずることは、誠に自然の現象である。「乳が崎沖まで」の唄が島に生まれ「淺間の煙」の唄が信濃高原に點在する宿驛の間に生まれ「麥ついて」の唄が伊豆南方の田舍に生まれてゐる事を考へ合はせると、民謡と地方との關係をほゞ推測することが出來よう。たゞ民謡の優れたものは、それが口うつしに他の地方に傳はり易いから、それが土地なまりを加へて、いづれの唄がいづれの地に發生したかを見分け難いことも少くない。併しながら、よし轉訛したとしても、その唄も土と人とを離れては行かれぬから、その轉訛に自ら地方的個性が現れて來る。例へば「麥ついて」の歌は甲

在所

稲生澤村 靜岡縣賀茂郡下田町の近傍。

平安朝時代 平安奠都から平氏滅亡まで約四百年間。

斐の南方では、

大麥ついて、麥ついて、お手にまめを九つ、九つのまめを見れば、親の在所こひしよ。

と唄つてゐる。伊豆南方の暖地と、自然にその調子と響とを異にしてゐるのが味はれる。

この苗をとりあげて、どこに棲まずや、いなごや、きりすすき、すき葦のこやのうちに棲まずや。

これは、伊豆の南方の稲生澤村の苗取唄である。思ふに、この歌謡は、決して近代のものではない。少くとも平安朝時代か、或はそれ以前に生まれたものが、その優れた秀でた調子を持つがために、南方の邊土に今日まで轉訛しながらも生命を存してゐるのである。歌體が幼くて、哀憐の心が充ち滿ちて

結く

ゐる。この美しい心情を持つた民謡が、今日の日本に残つてゐて、現在農夫の口に歌はれてゐることは、民族の誇とするに足ると思ふ。

「苗を取りあげた後は、いなごよ、お前はどうするのか。刈つたすゝきや、結きあんだ葦の小屋の中に、自分とともに住まないか。」といふその心は、なんといふ單純な、同情の籠つた、愛に満ちた心であらう。

自然の中に愛に包まれて、その日の勞働をいそしみながらも、一匹の蟲にも親しい心を持つ農夫の生活が涙ぐましいまでに尊い。「この苗をとりあげて」は、原作は勿論「この稲を刈りあげて」であつて、それが苗取歌に轉用されたものと思はれる。この唄は他の地方にも残つてゐるが、歌の體から考へて、伊豆

強清水

出色

八ケ嶽

長野縣・山梨縣に跨る、赤岳（二六九米）を主峰とし、硫黄岳・根石岳・權現岳等八峰が連る、故にこの名がある。

濕潤

赤彦全集

八卷、赤彦の全著作を集む、昭和四年（二九九十一月―昭和五年十月刊行

のものが最も原作の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し、二の坂越して、三の坂越しや、強清水。

これは信濃國の民謡中出色の一である。草刈馬に乗つて、八ケ嶽の裾野を上る。一の坂がある、二の坂がある。坂を上るうちに汗が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷たくしみ入るほどの強清水が湧いてゐる、といふ意で、草刈の男女に唄はれる事によつて、この唄の趣が深い。さうして、どこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明かるさは暖いが、山國の明かるさは寒い。それが、これ等民謡の中にも現れてゐるのである。

（赤彦全集第五卷）

長塚　節

九二頁參照。

蟄居

一九　土

長塚　節

春は、空から、さうして土から、微に動く。毎日の樣に西から埃を捲いて來る疾風が、どうかするとはたと止つて、空際には、ふは〳〵とした綿のやうな白い雲が、ぽつかりと暖い日光を浴びようとして僅かに立騰つたといふ樣に、動きもしないで凝然としてゐる事がある。水に近い濕つた土が、暖い日光を思ふ一杯に吸うて、其の勢づいた土の微な刺戟を根に感ぜしめるので、田圃の榛の木の地味な蕾は、目に立たぬ間に少しづつ伸びて、ひら〳〵と動き易くなる。其の刺戟から、蛙はまだ蟄居の狀態に在りながら、稀にはそつちでもこつちでも、くゝくゝと鳴出す事がある。空から射す日の光はそろ〳〵と熱

とだしば

假死

度を增して、土はそれを幾らでも吸うて止めぬ。土はすべてをだん〳〵と刺戟して、堀の邊には蘆やとだしばや其の他の草が空と相映じて、すつきりと其の首を擡げる。軟かさに滿たされた空氣を更に鈍くする樣に、榛の木の花はひら〳〵と止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒散らしてゐる。蛙は、假死の狀態から離れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いた樣な樣子をして空を仰いで見る。さうして、彼等は、慌てたやうに聲を放つて、其の長い睡眠から復活したことを空に向かつて告げる。それで、遠く聞く時は、彼等の騷がしい聲は只空にのみ響いて快げである。

彼等は、更に、春の到つたことを一切の生物に向かつて知らす。草や木が心づいて其の活力を存分に發揮するのを見な

蠶豆

偃うて(偃ひて)
きに〳〵

いうちは、鳴く事を止めまいと力める。田圃の榛の木は、とうに花を捨てて、自分が先に嫩葉の姿になつて見せる。黄色味を含んだ嫩葉が、爽で且朗な朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下に、まだ猶豫うてゐる周圍の林を見る。岬の樣な形に偃うてゐる水田を抱へて、周圍の林は、漸く其の本性のまに〳〵、勝手に、白つぽいのや、赤つぽいのや、黄色つぽいのや種々に茂つて、それが氣が附いた時に急いで一つの深い緑になるのである。雜木林の其處ら此處らに散在してゐる開墾地の麥もすつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黑い瞳を聚めて羞づかしさうに葉の間からこつそりと四方を覗く。雜木林の間には、又、芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。其の麥や芒の下に居を求める雲雀が、時々空を占めて、春が闌けた

眩しさ
坪へ一絶え。
煌く

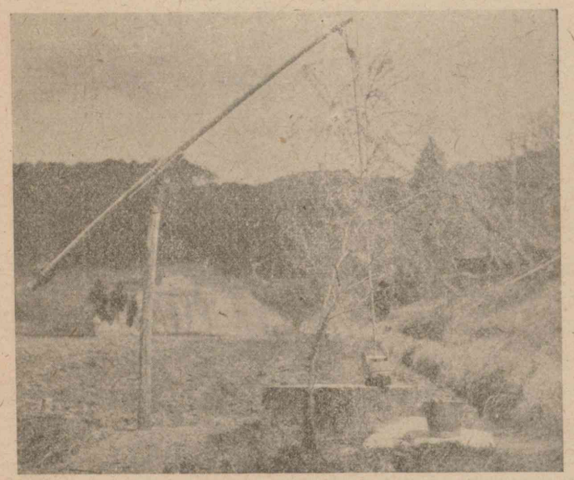
と喚びかける。さうすると、其の同族の聲のみが空間を支配してゐるべき筈だと思つてゐる蛙は、其の囀る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛越え飛越え鳴立てるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中にのみ、これを仰げば眩しさに堪へぬやうに其の身を遙に煌く日の光の中に沒して、其の小さな喉のちぎれるまでは劇しく鳴らさうとするのである。蛙は、いよ〳〵益、鳴き矜つて、樫の木のやうな大きな常磐木の古葉をも一時にからりと落さねば止むまいとする。

此のとき、すべての樹木や、それから冬季の間にはぐつたりと地に附いてゐたすべての雜草が、爪立ちして、只空へ〳〵と暖な光を求めて止まぬ。土がそれを凝然と引留めて放さな

絃絲

い。それで一切の草木は土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と並行する事を好んでゐた人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して各自に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと人が思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふ程喉の袋を膨脹させて、身を搖るがしながら殊更に鳴きたてる。白い絃絲の樣な雨は、水が田に滿つるまでは注いで又注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生まれて來た蛙は、刈株を引返し〳〵働いてゐる人々の周圍から、足下から逼つて、敏捷に其の手を動かせ〳〵と促して止まぬ。蛙がぴたりと聲を呑む時には、日中の暖さに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。さうして、蛙はひつそりと靜かな夜になると、如何に自分の聲が遠く且

遙に響くかを矜るもののごとく、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲は、めつきり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳をくすぐつて、百姓のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡する事によつて、百姓は皆短い時間に疲勞を恢復する。彼等が雨戸の隙間から射す夜明の白い光に驚いて、布團を蹴つて外に出ると、今更の樣に耳に逼る蛙の聲に其の覺醒を促されて、井



春光

土

長塚節著、著者の郷里の農民の生活を描いた小説、明治四十三年（一九一〇）六月新聞に連載せられたもの。

長塚節歌集

昭和五年（一九三〇）三月刊行。

戸端の冷たい水に全く朝の元氣を喚返すのである。草木は、遠く遙に響けと鳴く其の聲に撼られつゝ、夜の間に成長する。櫟や楢や其の他の雜木は、蛙が鳴けば鳴くほど、さうして、それが鳴き止む季節までは、幾らでも繁茂することを繼續しようとする。其處には、毛蟲や其の他のあさましい損害が或は有るにしても、しと〳〵と屢梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふやうに力强い深い綠が、地上を掩うて爽かな涼しい蔭を作るのである。

（土）

鬼怒川の篠の刈跡にやはらかき蓬はつむも笹葉搔きよせ
麥の葉は天つひばりの聲ひびき一葉一葉に搖りもて延ぶらし
蛙らはみな塗込めの畦越えて遠田こち田と鳴きめぐるらし

（長塚節歌集）

島崎藤村

名は春樹、長野縣の人、詩人、小說家、明治五年（一八七二）生。

小諸

信越線の一驛、小諸町、藤村は明治三十二年（一八九九）二十八歳の時、小諸義塾に赴任、同三十八年（一九〇五）に去つた。

小諸なる遊子

紫菫

衾

二〇 千曲川旅情の歌

島崎藤村

小諸なる古城のほとり

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ。
綠なす蘖蔓は萌えず
若草も藉くによしなし。
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る。

あたゝかき光はあれど
野に滿つる香も知らず、

はつかに（わづかに）

佐久
長野縣北佐久郡。

千曲川
佐久平の南部に發源し、川中島で犀川と合して信濃川となる。

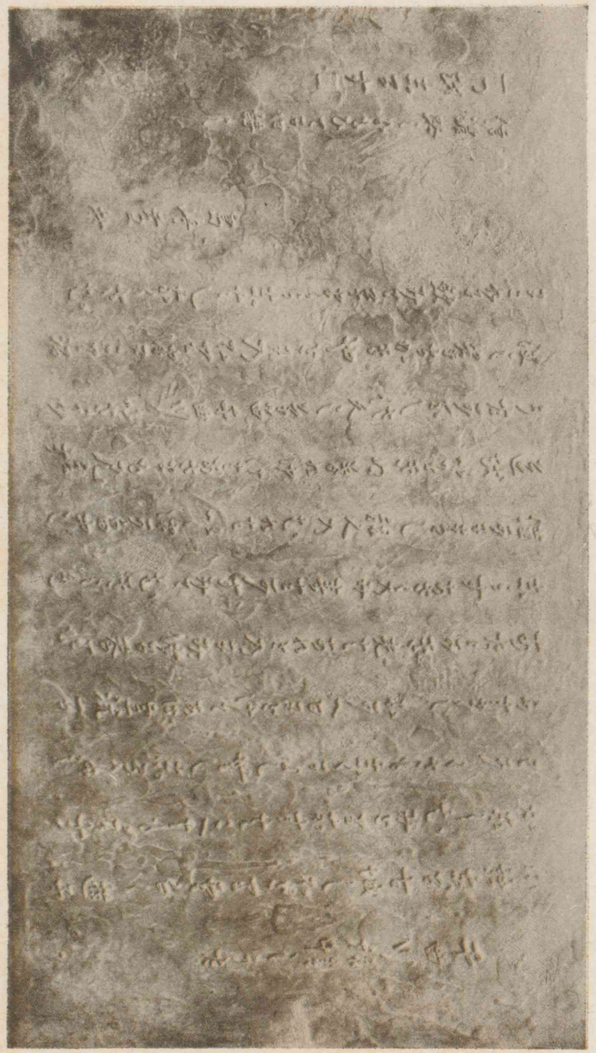
濁り酒

落梅集
島崎藤村著、詩集、明治三十八年（一九〇五）八月刊行。

淺くのみ春は霞みて
麥の色はつかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ。

暮行けば淺間も見えず、
歌哀（かな）し佐久の草笛。
千曲川いさよふ波の
岸近き宿にのぼりつ。
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む。

（落梅集）



藤村詩

藤村詩碑より千曲川を望む

齷齪

千曲川のほとりにて

昨日またかくてありけり、
今日もまたかくてありなむ。
この命なにを齷齪
明日をのみ思ひわづらふ。

いくたびか榮枯の夢の
消殘る谷に下りて、
河波のいさよふ見れば
砂まじり水卷返る。

嗚呼古城なにをか語り、
岸の波なにをか答ふ。
いにし世を靜かに思へ、
百年もきのふのごとし。

千曲川柳霞みて
春淺く水流れたり。
たゞひとり岩をめぐりて
この岸に愁を繫ぐ。

（落梅集）

北畠親房
學者、政治家、吉野朝廷の忠臣、顯家等の父、正平九年（一三五四）薨、年六十三。

きほふ
前車の轍

鳥羽院
第七十四代鳥羽天皇、御讓位後院政を執り給ふ、保元元年（一八六）崩御、御年五十四。

制符

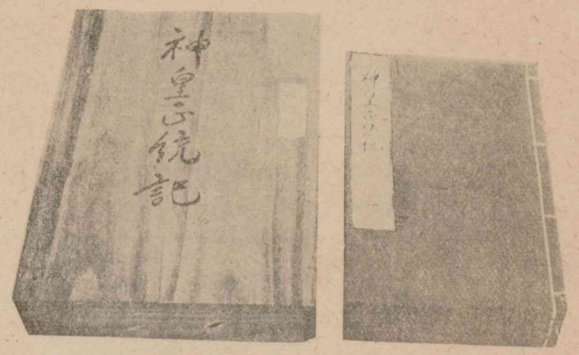
二一 人臣の道

北畠親房

凡そ王土に生まれて忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されど、後の人を勵まし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功もなくして過分の望をいたすこと、自ら危うする端なれど、前車の轍を見ることはまことに有難き習なりけむかし。中古までは、人のさのみ豪强なるをば戒められき。豪强になりぬれば必ず驕る心あり。はたして身を滅し家を失ふためしあれば、戒めらるゝも理なり。鳥羽院の御代にや、「諸國の武士の源平の家に屬する事をとゞむべし。」といふ制符度々ありき。源

宣旨
語らはる
いひがひなし
家子
郎從
申すめる
あらじ―あらず

平久しく武をとりて仕へしかども、事あるときは宣旨を賜はりて諸國のつはものを徵し具しけるに、近代となりて、やがて語らはるるやから多くなりしによりて、この制符は下されにき。果していままでの亂世の基なれば、いひがひなきことになりにけり。この頃の諸には、一たび軍に駈合ひ、或は家子・郎從節に死ぬる類もあれば「我が功におきては、日本國を賜へ。」若しは「半國を賜はりても足るべからず。」などと申すめる。まことにさまで思ふ事はあらじなれど、やがてこれ



神皇正統記（白山本）

言語は
易の繫辭傳の語。
樞機
あからさまに
事にこそ
堅き氷
霜ヲ履ンデ堅氷至ル。（易經）
末世
許由・巢父
共に堯の代の隱者。
堯
支那上古の天子。
潁川
支那河南省にある。
五臟六腑

より亂るゝ端ともなり、又、朝威の輕々しさも推量らるゝものなり。「言語は君子の樞機なり。」といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕る事はあるべからぬ事にこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣・賊子といふものは、その初め、心・言葉を愼まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらず、人の心の惡しくなりゆくを末世とはいへるにや。

昔、許由と云ふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、此の水をだにきたながりて渡らず。その人の五臟・六腑の變るにはあらじ。能く思ひ習はせる故にこそあらめ。

なほ行末の人の心、思ひやるこそ淺ましけれ。大方己一身

萬姓の主

將門　平將門、桓武天皇の皇子葛原親王の玄孫、天慶元年（一三九）叛き、同三年誅に伏した。

は恩に誇るとも、萬人の怨を殘すべき事をばなどか顧みざらん。君は萬姓の主にてましませば、限ある地をもちて、限なき人に分かたせ給はん事は、推じて測り奉るべし。若し一國づつを望まば、六十六人にて皆塞がりなん。一郡づつと云ふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は喜ぶとも、千萬人の人は喜ばじ。況や、日本の半ばを志し、みながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、詞にも出で、面に恥づる色のなきを、謀叛の初と云ふべきなり。昔の將門は、比叡山に登りて大内を遠見して謀叛を思ひ企てけるも、かゝる類にや侍りけん。昔は人の心正しくて、自ら將門に見も懲り聞きも懲り侍りけん。今は人々の心かくのみなりにたれば、この世はよく衰へぬるにや。

漢の高祖　秦を亡し漢朝を建てた、在位十二年、（西暦前二〇六―一九五）。

蕭何　主として軍糧を司る、後故あつて獄に下る、惠帝二年（西暦前一九三）卒。

韓信　高祖に從つて秦を亡し、齊王に封ぜられ、高祖の十一年（西暦前一九六）殺された。

籌を云々　「夫レ籌策ヲ帷幄ノ中ニ運ラシ、勝チヲ千里ノ外ニ決スルハ、吾子房ニ如カズ。」（史記、高祖本紀）

帷幄　陸奥の藤原氏第四代の主、文治五年（一八九）頼朝に討たれて歿、年二十五。

平重忠　畠山重忠、源頼朝の重臣。

泰衡　陸奥五十四郡。

漢の高祖の天下を取りしは、蕭何・張良・韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人にすぐれたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の師として、「籌を帷幄の中にめぐらして、勝つ事を千里の外に決するはこの人なり。」と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひて少しきなる處を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかど、張良は身を全くしたりき。近き代の事ぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討ちしに、自らむかふ事ありしに、平重忠が先陣にてその功勝れたりければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたる少しき處を望みて賜はりけるとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめんが爲にや。賢かりけるをのこにこそ。又直實と云ひける者に一處を與へ給ふ下文に、

長岡
今の宮城縣遠田郡内の地。

直實
熊谷氏、源頼朝の臣、宇治川・一の谷の戰に功あり、後、出家して蓮生坊といふ、承元二年（一八六）歿。

下文
甲の者

風儀
はえばえし

神皇正統記
北畠親房著、神代より後鳥羽上天皇までの事蹟を記し、吉野朝の正統なる由を述べたもの、延元四年（一九九）の著作。

「日本第一の甲の者なり。」と書きて賜はりけり。一とせ、かの下文をもちて奏聞する人のありけるに、褒美の詞の甚だしきに、與へたる處の少き、誠に名を重くして利を輕くしける、いみじき事と口々に褒合へりけり。いかに心得て褒めけんといとをかし。

これまでの心こそなからめ、事に觸れて君を落し奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の東國の風儀も變り果てぬ。公家の古き姿もなし。いかになりぬる世にかと歎き侍る輩もありと聞えしかど、中一年ばかりは、誠に一統のしるし覺えて、天の下擧り集りて、都の中はえ〴〵しくこそ侍りけれ。

（神皇正統記）

中村孝也
群馬縣の人、歴史家、文學博士、東京帝國大學教授、明治十八年（一八五五）生。

創造的精神
先行的に
復古的精神

三　明治維新の精神

中村孝也

明治維新は國史における空前の大革新であります。この機會において國民生活は一大展開を遂げました。これを考察するのには、經濟の方面からも、政治の方面からも、思想の方面からも、これをなすことが出來ますけれども、こゝでは暫く思想卽ち精神的方面に立つて一言批判を試みたいと思ふのであります。

明治維新の大精神の中心たるものは、創造的精神であります。しかしながら、それに對し先行的に働いたものは、復古的精神でありました。この二つの力が相合して、よく現狀打破・新生活展開の成績を擧得たのであります。故に、まづ復古思

朱子學派　支那宋の朱熹の唱へた學說を奉ずる學派で、宇宙に理・氣の二元あり、人に本然・氣質の二性ありとし、それによつて種々修養の法を說くもの、我が國では藤原惺窩・林羅山・木下順庵・尾藤二洲等の人々がこれに屬する。

陽明學派　支那明の王陽明が唱へた學說を奉ずる學派で、知・行の合一を說くもの、我が中江藤樹・熊澤蕃山はこれに屬する。

伊藤仁齋　名は維楨、山城國（京都府）の人、江戸時代中期の儒者、寛永二年（一六二五）歿、年七十九。

荻生徂徠　名は雙松、字は茂卿、號は蘐園、本姓は物部氏、物徂徠といふ、江戸時代中期の儒者、享保十年（一七二五）歿、年六十三。

想の方面を眺め、次いで、創造的精神の方に移らうと思ふのであります。

復古思想は江戸時代における思想界を貫ぬいて存する盛な大潮流でありました。試みに儒教に就いてこれを見ますならば、朱子學派・陽明學派の如き外來の學派に對して、伊藤仁齋・荻生徂徠の古學派が起つて、宋・明を超越して直ちに孔・孟の古に復歸しようと致しました。國學に就いて見ますならば、これは中世・上代文學を振返つて見るものでありました。神道に至りましては、更に古代外來思想の影響を受けなかつた時の國民信仰を回顧するものでありました。歷史もまた主として古代史を研究したのであつて、同じく復古思想の表現であります。この復古思想が政治の方面に現れて、武家の方

古學派　宋・明の性理學に反對し、註釋によらず、直ちに儒書の本文を研究して孔・孟の眞意を發揮しようとした學派

吉宗　寶曆元年（一七五一）歿、年六十一。

享保　第百十四代中御門天皇・第百十五代櫻町天皇の御代の年號（一七一六―一七三六）。

權現樣　東照大權現は元和三年（一六一七）德川家康に賜はつた勅諡號。

御捉慶長・元和　慶長は第百七代後陽成天皇の御代の年號（一五九六―一六一五）元和は第百八代後水尾天皇の御代の年號（一六一五―一六二四）。

寛政　第百十九代光格天皇の御代、（一七八九―一八〇一）。

天保　第百二十代仁孝天皇の御代、（一八〇一―一八四四）。

では德川氏の始祖たる家康を規準に立て、八代將軍吉宗はその享保の改革に當つて「萬事權現樣御捉の通り。」といふ言葉を套語として、直に慶長・元和の古に復することに努めました。次いで、寛政の松平定信は、近くしては吉宗の享保時代、遠くしてはまた家康の時代に復せんことに努めたのであります。降つて、天保の改革者水野忠邦は、近くしては寛政の定信、溯つてはせめて享保の將軍吉宗にまで復しようと努めたのでありました。

飜つて、朝廷の側でこれを見ますと、王政復古運動の戰線に立つて、皇室中心の新しい時代を打開かうと努めたところの人々は、近く建武中興の政治を標準としたのであります。建武中興は後醍醐天皇によつて成された改革でありますが、そ

水野忠邦　江戸時代後期の政治家、將軍家齊・家慶に仕へて老中となつた、嘉永四年（一八五一）歿、年五十九。

宇多天皇・醍醐天皇・村上天皇の時代　第五十九・六十・六十二代の天皇、寛平・延喜・天曆の治といはれる時代。

大覺寺統　第八十九代後深草天皇の御子孫を持明院統と申すに對して、第九十代龜山天皇の御子孫を申す。

後宇多天皇　第九十一代。

後醍醐天皇　第九十六代。

後村上天皇　第九十七代。

の理想の標準として仰ぎ見たのは、平安朝の盛時たる宇多天皇・醍醐天皇・村上天皇の時代でありました。大覺寺統の御歴代には後宇多天皇・後醍醐天皇・後村上天皇が相繼いで立たせられてをりますので、その御追號を通してすらも、平安朝の盛時にあこがれてをられたことが思はれるのであります。

然るに、その王朝の盛時の淵源は、なほ溯つて、神武天皇の創業に存するのでありました。こゝにおいて、明治維新の復古思想は、近く建武中興に止ることなく、更に平安朝の盛時を經て、溯つて遠く神武天皇創業の古に復せんとするやうになりました。これ實に復古思想の最も雄大なるものであります。然るに、神武天皇創業の時代においては、いまだキリスト教の傳來なく、また佛教の傳來なく、更に儒教の傳來すらもなく、即

喩―譬―例

核子

ち、一切の外國文化・外來思想の影響を蒙ることなく、喩へば、生まれ落ちたまゝの純眞な姿でありまして、そこに最も正しい日本精神が存在したのでありました。この日本精神が、その後、幾多の外來文化に養はれ、育てられて、複雜な生活内容をもつに至つたのでありますが、今や神武天皇創業の御精神を發揮することを目標とするに至つたのは、要するに、純粹な日本精神を發揚せんとすることに外ならないのであります。

然らば、その日本精神の中心核子たる力は何であるかと申しますと、一言にして盡くせば、それは祖神崇敬の信仰であります。祖神崇敬を分解致しますと、崇祖と敬神とになります。崇祖は祖先崇拜であり、敬神は神祇崇拜であります。我々が自己の生命を考へる時に、肉體の淵源を祖先の血統に求め、心

連綿と澎湃と

回顧的で

靈の淵源を神の信仰に求めることは、人類共通の現象であり、珍しいとするに足らないことでありますが、この二つが合體して、あらゆる祖先は悉く神であり、あらゆる神は悉く祖先であるといふ信仰をもつのは、日本國民固有の事實でありまして、數千年來、連綿として今日に至り、なほ且我々の胸中に澎湃として溢れ漲つてゐるところのものであります。故に、この中心觀念を振返つて見たところの明治維新の根本の力は、祖神崇敬の信仰を確立するにあつたと考へるのであります。

しかしながら、この復古思想は、明治維新の大革新の主たる部分ではなくして、實はこれを基礎として、將來に向かつて新な生活樣式を建設することの方が重要な部分を占めたのであります。言換へてみますと、復古思想は回顧的でありますが、たゞ徒に過去を振返つて見る目的をもつて振返つたのではなく、實は將來に向かつて正しく進まんがためにまづ振返つて見たのであります。凡そ、正しく進まんと欲するものは、まづ正しく顧みることを要します。過去より現在に亙つて進んで來た大道は、將來またこれによつて進むべきものであつて、こゝに新な生活樣式を建設せんとする創造精神が働いて來るのであります。こゝにおいて、武家階級本位の生活は破壞され、國民全體の生活を創造する力が動いて、三つの方面に現れて來ました。

經濟組織

第一　經濟方面では資本の價値が自由に伸びて、資本經濟組織を完成し、從來の土地經濟組織に代ることになりました。

第二　思想の方面では、皇室中心の國民生活をもつて、最も

國際的地位

正しく、又、最も健全なものとする思想が國民を通じて尊重せられ、永い武家時代を通じて存してをつた、皇室の外に別に幕府を中心とする不徹底な誤れる思想が打破られました。

第三　政治の方面では、內にしては皇室中心の立憲政體が確立し、外にしては國力が伸長し、領土は擴大せられ、國際的地位は高まり、國威は全世界に發揚せられました。

かくの如くして、經濟と、思想と、政治との三方面が變化したことは、卽ち、社會生活の全部が變化したことになるのであります。こゝにおいて、前進的・躍進的の氣分が滿溢れて參りました。夜は明けました。朝曦は爽に美しく東の空に昇りました。進軍喇叭の聲は嘹喨として野にも山にも勇ましく反響し、新時代は朗に展開して參りました。

エマーソン
アメリカ合衆國の文學者、思想家、（西曆一八〇三―一八八二）。

明治元年
紀元二五二八年。

經綸

私は明治維新の歷史を繙くたびに、常にエマーソンの詩を想ひ起すのであります。

過去のすべてを拂ひのけて
見よ！　新しき時代は來る。
萬象再び新にして、潑剌たる生氣あり。
その業は大地に溢れ、その叫は世界に滿つ。
爾等世界に出でよ！

明治元年三月十四日、明治天皇は五箇條の御誓文を宣せさせ給ひ、そして「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ。」と仰せられました。その御指導に隨つて、我々日本國民は、舊來の陋習を破り、天地の公道に基づき、智識を世界に求め、大いに皇基を振起し奉り、上下心を一にし、盛に經綸を行ひました。そ

中天

ひれふす

の結果、僅かに七十年にして、狹かつた領土は廣くなり、少かつた人口は多くなり、弱かつた國力は強くなり、低かつた國際的地位は高くなり、今や日輪の中天に輝く如く、日本國家の存在は、全世界の人類の仰ぎ見るところとなりました。

しかしながら、靜かに己を顧みる時、我々が四方の門戸を開いて求め得たところの文化は、果していかなる價値を有するものでありましたらうか。我々は、今日明治神宮の御前に平伏して、明治天皇の御神靈に對し奉り、「及ばずながら御思召を奉じて、まさに智識を世界に求めました。」と、御報告申し上げることは出來ます。出來ますけれども、その求め得た智識が、果してすべて明治維新の大精神に適するものなりや否や、この點に就いて今日深く顧みる必要があるのであります。

日本文化史要

中村孝也著、日本文化史の要領をまとめたもの、昭和五年（一九三〇）六月刊行。

女子新國語讀本

新制版　卷六　終

池内に影をうつす寒椿

昭和十二年八月五日印刷
昭和十二年八月十五日發行
昭和十三年一月二十二日訂正再版印刷
昭和十三年七月二十七日訂正再版發行
昭和十六年七月十二日訂正三版發行

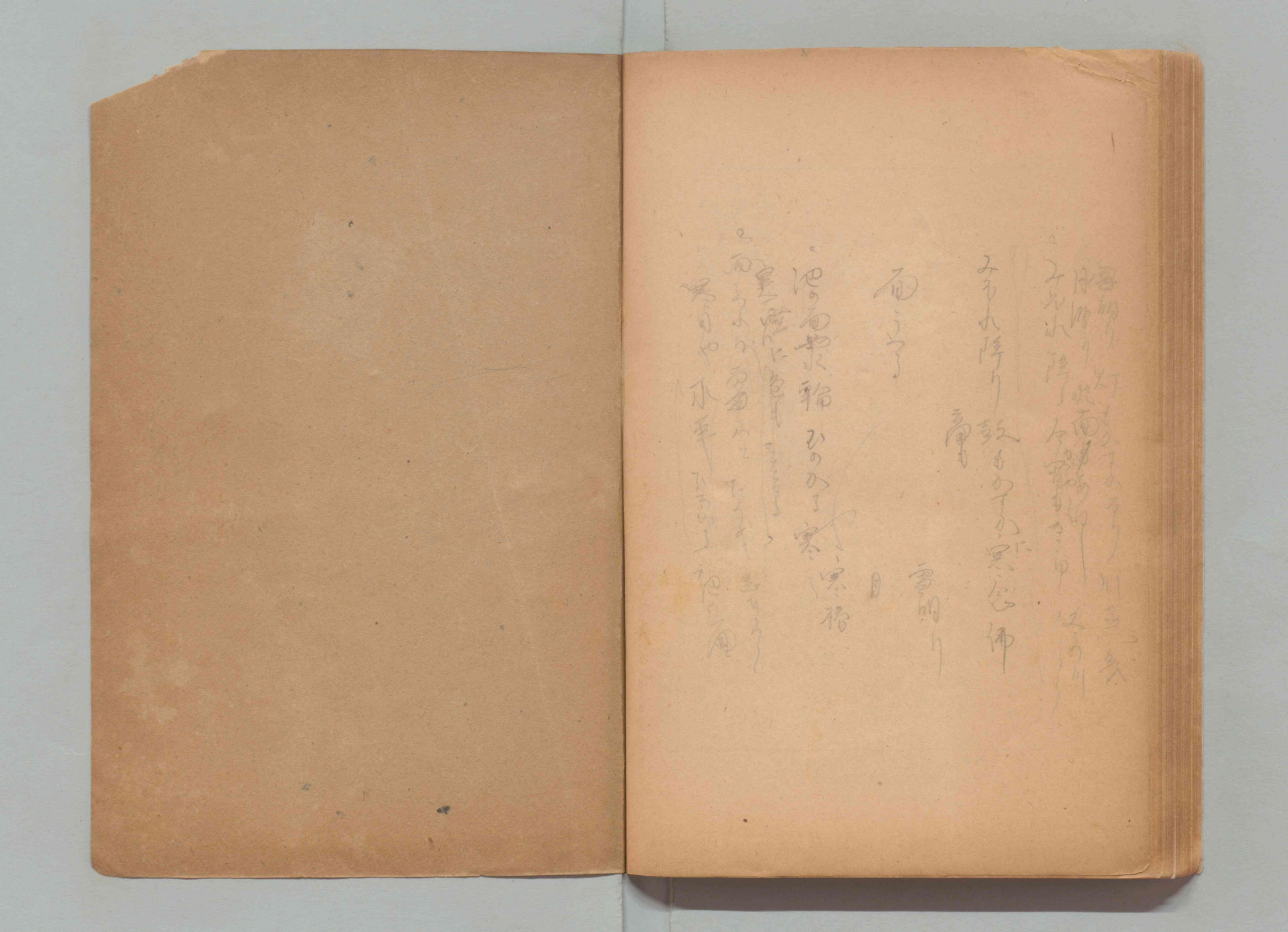
女子新國語讀本（新制版）
定價　各金六拾錢

編者　澤瀉久孝　木枝增一

發行者　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地　中等學校教科書株式會社　代表者　山本慶治

印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目二十三番地　合名會社　交進社印刷所　代表社員　余部留吉

發行所　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地　中等學校教科書株式會社　日本出版文化協會會員番號　一一七五二二

（略名）修文澤瀉女國

日本出版配給株式會社　元給配
東京市神田區淡路町2ノ9